

浜松城跡 9 次

2013年3月

浜松市教育委員会



浜
松
城
跡
9
次

二〇一三

浜
松
市
教
育
委
員
会

例　　言

- 1 本書は浜松城公園（静岡県浜松市中区元城町100-1・2外）における浜松城跡（9次調査）の発掘調査（確認調査）報告書である。
- 2 発掘調査は、浜松城公園における整備事業の計画策定に先立ち、埋蔵文化財の状況を確認するために実施した。発掘調査は、浜松市（都市整備部緑政課）の依頼を受けて、浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行）が行い、実務は浜松市から委託を受けた国際文化財株式会社が担当した。調査にかかる費用は、全額浜松市が負担した。
- 3 発掘調査にかかる面積と期間は、以下の通りである。

調査面積　　1,396m²
委託期間　　平成24年（2012年）9月14日～平成25年（2013年）3月8日
(うち現地調査期間　平成24年（2012年）10月1日～12月27日)
- 4 調査は、鈴木一有・鈴木京太郎（浜松市市民部文化財課）の監理のもと、竹内俊之（国際文化財株式会社）が担当した。
- 5 本書の執筆は、第1章1および第3章を鈴木京太郎が、その他を竹内俊之が行った。編集は竹内が行った。
- 6 調査にかかる諸記録及び出土遺物は、浜松市市民部文化財課が保管している。
- 7 本書で用いる座標値は、世界測地系に基づく。方位（北）は座標北、標高は海拔高である。
- 8 本書では参考文献等の表記において、以下のような略称を用いる。

教育委員会→教委　　（財）浜松市文化振興財団→浜文振
- 9 本書の作成にあたり、向坂鋼二氏の現地指導を賜った。

目　　次

第1章　序　論	1
第2章　調査成果	12
第3章　総　括	34
図　版	

挿　表　目　次

Tab1　出土遺物観察表	32	Tab3　銭貨観察表	33
Tab2　瓦観察表	33	Tab4　石製品観察表	33

挿図 目次

Fig.1 浜松城跡の位置	1	Fig.12 第1工区出土遺物(2)	20
Fig.2 浜松城跡復元図	2	Fig.13 第1工区出土遺物(3)	21
Fig.3 昭和30年代当時の浜松城公園全体図	3	Fig.14 第2工区 作左山横穴実測図	22
Fig.4 浜松城跡の調査履歴	6	Fig.15 第2工区平面・断面図	23
Fig.5 作左山横穴	7	Fig.16 第2工区出土遺物	25
Fig.6 レンチ配置図	9	Fig.17 第3工区平面図	27
Fig.7 第1工区平面図	13	Fig.18 第3工区断面図	29
Fig.8 第1工区断面図(1)	15	Fig.19 第3工区出土遺物	31
Fig.9 第1工区断面図(2)	17	Fig.20 作左曲輪確定地と調査成果	34
Fig.10 第1工区造構実測図	18	Fig.21 遠州浜松城下絵図(二の丸北側を拡大)	35
Fig.11 第1工区出土遺物(1)	19	Fig.22 二の丸北側における調査成果	36

図版 目次

PL.1 1 第1工区・第2工区遠景 南東から ▼:第1工区 ▲:第2工区	PL.11 1 1-2工区北西-南東レンチ南側全景 北東から
2 昭和35年 旧動物園 南東から(復興天守から)	2 1-2工区北西-南東レンチ北側北壁セクション 南から
PL.2 1 1-1工区横断部西トレント 造構全景 南東から	3 1-2工区北東-南西レンチ西側北壁セクション 東から
2 1-1工区 SD01完掘 南東から	PL.12 1 1-3工区北東-南西レンチ全景 南西から
3 1-1工区 SK01検出 南西から	2 1-3工区北西-南東レンチ北側全景 北西から
PL.3 1 1-1工区 SK02完掘 南東から	3 1-3工区北西-南東レンチ南側全景 北西から
2 1-1工区 SP01完掘 南東から	PL.13 1 1-4工区レンチ全景 西から
3 1-1工区 SP02完掘 南東から	2 1-4工区レンチ下段部全景 東から
4 1-1工区 SP03完掘 南東から	3 2-1工区横断部トレント東側(深掘り1~2) 全景 南西から
5 1-1工区 SP04完掘 南東から	4 2-1工区横断部トレント西側(深掘り3~4) 全景 東から
6 1-1工区 SP05完掘 南東から	PL.14 1 2-1工区横断部トレント(深掘り6~5) 全景 南から
PL.4 1 1-2工区 造構全景 北西から	2 2-2工区トレント1 全景 東から
2 1-2工区 SD01完掘 北西から	3 2-2工区トレント2 全景 西から
3 1-2工区 SP01完掘 南東から	PL.15 1 2-2工区トレント3 北壁 全景 南から
4 1-2工区 SP02根固め石検出 北西から	2 2-2工区トレント4 上段部全景 北から
5 1-2工区 SP03根固め石検出 北西から	3 2-2工区トレント4 全景 南から
PL.5 1 2-2工区トレント5 SM01 南東から (作左山横穴)	4 2-2工区トレント5 全景 南から
2 2-2工区トレント5 SM01 南から (作左山横穴)	PL.16 1 2-2工区トレント5 東壁セクション 北西から
PL.6 1 1-1工区横断部トレント1 東側(深掘り1~4) 全景 北東から	2 3-1工区トレント1 南壁セクション 北から
2 1-1工区横断部トレント1 東側(深掘り5~6) 全景 北東から	3 3-1工区トレント2 東壁セクション 西から
3 1-1工区横断部トレント1 中央(深掘り6~10) 全景 北東から	PL.17 1 3-1工区トレント3 全景 西から
PL.7 1 1-1工区横断部トレント1 中央(深掘り10~11) 全景 北東から	2 3-2工区トレント1 西壁セクション 東から
2 1-1工区横断部トレント1 西側(深掘り14~15) 全景 北東から	3 3-2工区トレント2 西壁セクション 東から
3 1-1工区横断部トレント1 西側(深掘り15~16) 全景 北東から	2 3-2工区トレント3 西壁セクション 東から
PL.8 1 1-1工区横断部トレント2 東側全景 北東から	3 3-3工区トレント1 南側全景 南から
2 1-1工区横断部トレント2 中央全景 北東から	PL.18 1 3-3工区トレント1 中央南側全景 南から
3 1-1工区横断部トレント2 西側全景 北東から	2 3-3工区トレント1 中央北側全景 南から
PL.9 1 1-1工区横断部東トレント(深掘り3~2) 全景 南東から	3 3-3工区トレント1 北側全景 南から
2 1-1工区横断部中央トレント南側(深掘り8) 全景 南東から	PL.20 1 3-3工区トレント2 全景 南から
3 1-1工区横断部中央トレント(深掘り9) 南西壁セクション 北東から	2 3-3工区トレント3 北側全景 南から
PL.10 1 1-1工区横断部西トレント南側(深掘り13) 全景 南東から	3 3-3工区トレント3 中央全景 南から
2 1-1工区横断部西トレント北側(深掘り12) 全景 南東から	4 3-3工区トレント3 南側全景 北から
3 1-2工区北東-南西トレント全景 北東から	PL.21 1 戦国時代の遺物
	2 江戸時代の遺物
	PL.22 1 第1工区出土遺物(1)
	PL.23 1 第1工区出土遺物(2)
	PL.24 1 第2工区出土遺物
	PL.25 1 第3工区出土遺物

第1章 序論

1 調査にいたる経緯

静岡県浜松市中区に所在する浜松城跡は、市の中心部に位置し、天守曲輪周辺は石垣の一部が残存しており、浜松市指定史跡として保護されている。また、城跡の一部は浜松城公園として整備され、都市部の貴重な憩いの場として市民に親しまれている。

近年の浜松城公園は、利用者ニーズの多様化、各施設の老朽化などの課題が生じ、再整備が求められるに至った。そこで、市中心部の都市機能を充実させるため、公園及びその周辺において、長期的な視野に立った整備構想が検討されることになった。

こうした状況の中、公園区域の多くが、周知の埋蔵文化財包蔵地である浜松城跡と重なることから、その取り扱いについて、浜松市（都市整備部緑政課）と浜松市教育委員会（市民部文化財課が補助執行）が事前協議を行なった。その結果、浜松城公園内において遺構・遺物の残存状況を把握するための確認調査を実施し、今後の公園整備の計画策定に向けた検討資料を得ることになった。

調査は、浜松市教育委員会（市民部文化財課が補助執行）が行い、実務は、浜松市から業務を受託した国際文化財株式会社が実施した。現地調査は2012年の10月1日から12月27日にかけて実施した。調査面積は1,396m²である。

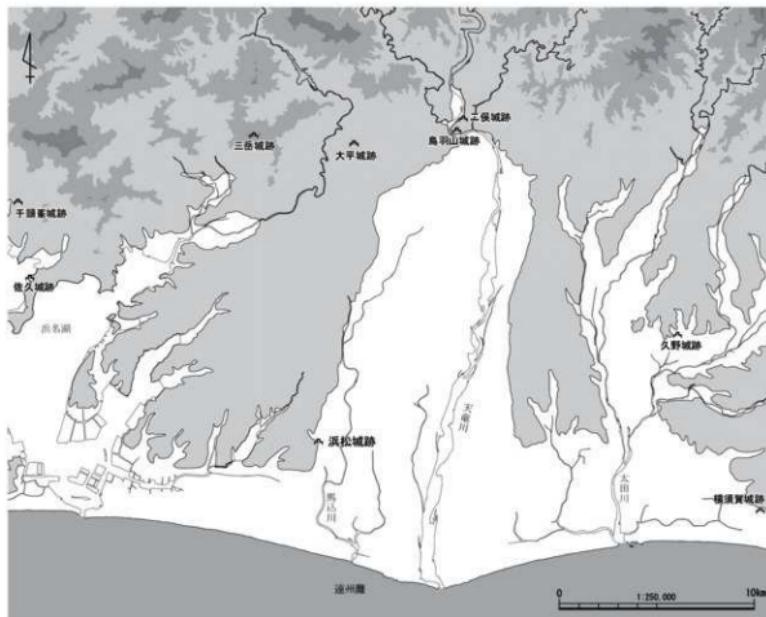


Fig.1 浜松城跡の位置

2 浜松城の歴史

浜松城は永禄11年（1568）、徳川家康が三河から東進し今川領を制圧とともに、遠江支配の拠点とするため、三方原台地の南東端の段丘上に築城した平山城である。前身の引馬城の城域が拡張され浜松城と呼称されるようになった。元亀元年（1570）、長子の信康に岡崎城を譲り、自ら移

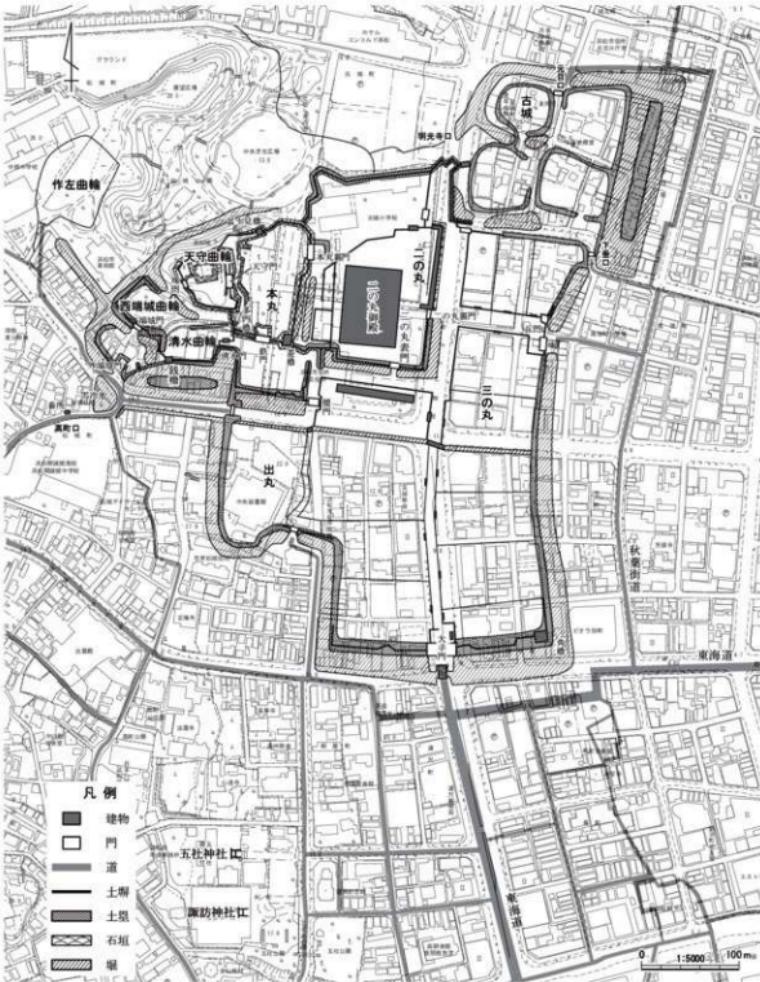


Fig.2 浜松城跡復元図

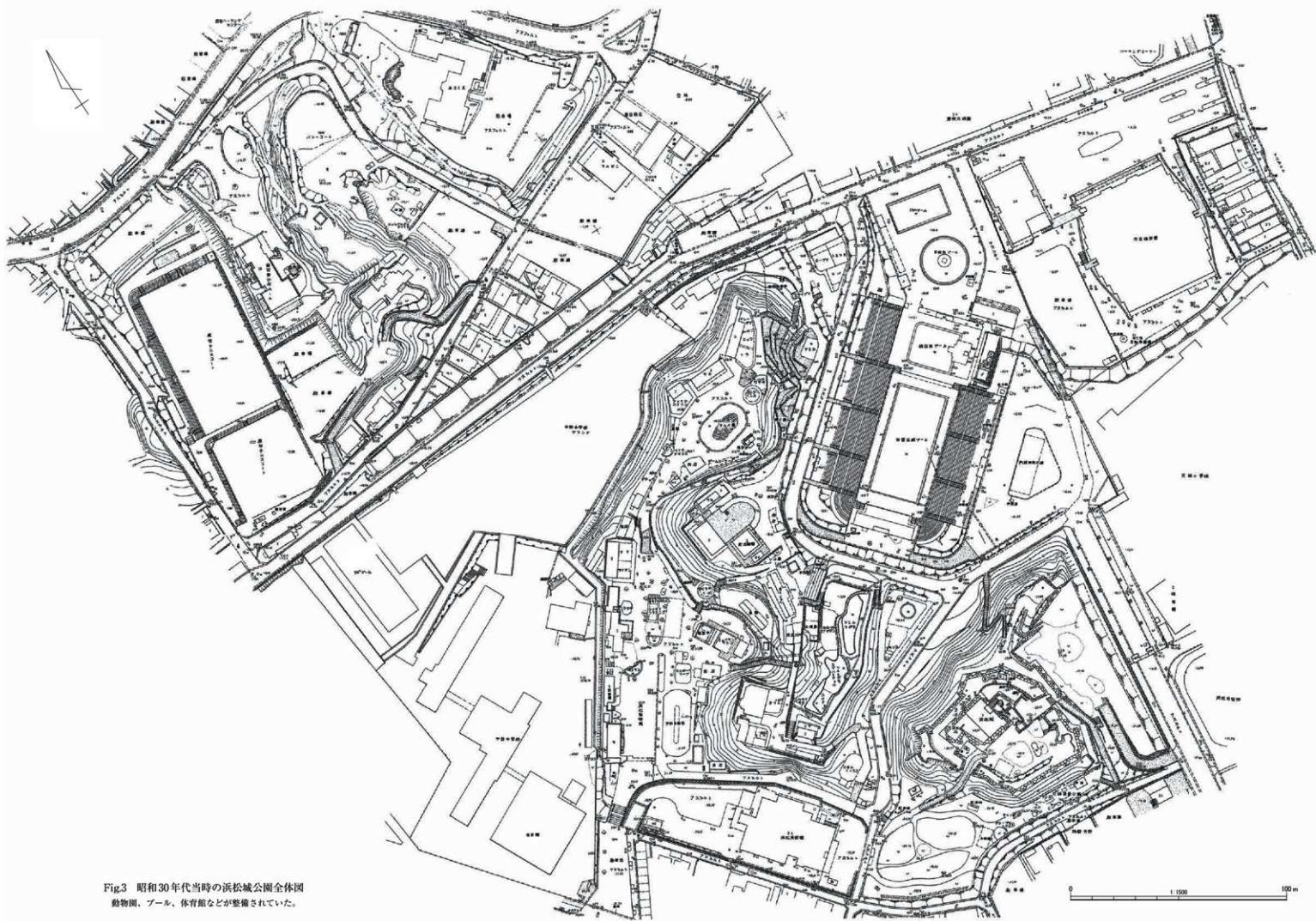


Fig.3 昭和30年代当時の浜松城公園全体図
動物園、プール、体育館などが整備されていた。

0 1:1500 100m

り駿遠経営の拠点とした。家康の在城は29歳から天正14年（1586）45歳で駿府城（静岡市）に入るまでの17年に及んでいる。浜松城の城郭は南北500m、東西約450mで西北の天守曲輪、その東に本丸、二の丸、さらに東南に三の丸と、ほぼ直線上に並ぶ「梯郭式」の築城法である。

城域の北西には家康臣下である本多作左衛門重次に由来する「作左」という地名が残り、この地からは16世紀後半の陶器片が出土している。

天正18年（1590）豊臣秀吉が天下統一を成し遂げ、家康が関東に移封されると、豊臣系の大名である堀尾吉晴が城主となり、石垣や天守、瓦葺きの建物を備えた近世的な城郭として変貌した。現在の天守曲輪や本丸にみる石垣の多くは、この時期に構築されたものとみられる。

関ヶ原の戦いで家康が勝利すると徳川譜代の家臣が配置され城主を努めた。江戸時代の初めには三の丸が整備され、現在の町並みにみられるような城下町が形成された。

明治6年（1873）の廃城令により建物や土地が払い下げられ、三の丸、二の丸は宅地化が進んだが、天守曲輪と本丸の一部は開発から免れた。昭和24年（1949）、城跡を含む12.6ヘクタールが都市計画公園に決定され、昭和25年（1950）の浜松こども博覧会閉会後の跡地に動物園が開園されたのを機に浜松城公園開設に至る。昭和33年（1958）、野面積みの天守台の上に鉄筋コンクリート製の復興天守が落成し、翌年には天守曲輪周辺が浜松市の史跡に指定となる。公園内では昭和38年（1963）に浜松市体育館、昭和46年（1971）に浜松市美術館などが開館される。昭和57年（1982）、動物園が館山寺総合公園へ移設される。昭和60年（1985）、動物園跡地の丘陵部分が作左の森・展望広場として整備される。平成20年（2008）には浜松市体育館が解体撤去され、現在のような公園の姿へと至っている。

3 調査履歴

調査履歴 浜松城跡は、これまで天守曲輪や本丸を中心に1～8次にわたる発掘調査と工事立会が行われてきた。これらのうち1～3次調査（1960、1979、1984）は1996年刊行の報告書（浜松市教育委1996）にまとめられている。4～6次調査（2009～2011）は浜松市が策定した浜松城歴史ゾーン整備基本構想に関連して天守曲輪天守門および本丸富士見櫓を対象とし、7次調査（2011）は2011年のセントラルパーク基本構想の策定に先立ち、二の丸および御誕生場を対象として実施した。これらの成果は、調査年次ごとに報告書を刊行している（浜文振2010・2011・2012・2012）。8次調査（2012）は天守門を対象として既往調査を補足している。本書で報告する9次調査（2012）は、浜松城公園における整備事業の計画策定に先立ち城域北側の周辺部を対象とした。

なお、9次調査では昭和39年（1964）に調査を行い、その後の公園の整備により正確な地点が不明であった作左山横穴の一部を再確認することができた。作左山横穴の概要を当時の調査報告（向坂1976）から以下に引用する（図はFig.5に転載）。

横穴墳は、浜松城天守閣から谷をへだてた北側の丘陵斜面にあり、現在浜松市動物園となっている。園内の東北地区には鹿と山羊を露天に放し飼いしている部分があり、外周圍路に面する低いところには山羊が飼れている。この部分の柵内に現在ブロック造りの小舎があるが、そのまうしろに石垣を積むため、若干山の斜面を削ったところ、後述する須恵器が発見されたというのである。私は、発見地点の山を削った断面に、円碟がでているのをみて、古墳の敷石と判断したので、石垣から奥へ1mほど発掘してみた。敷石はそこで終ってお

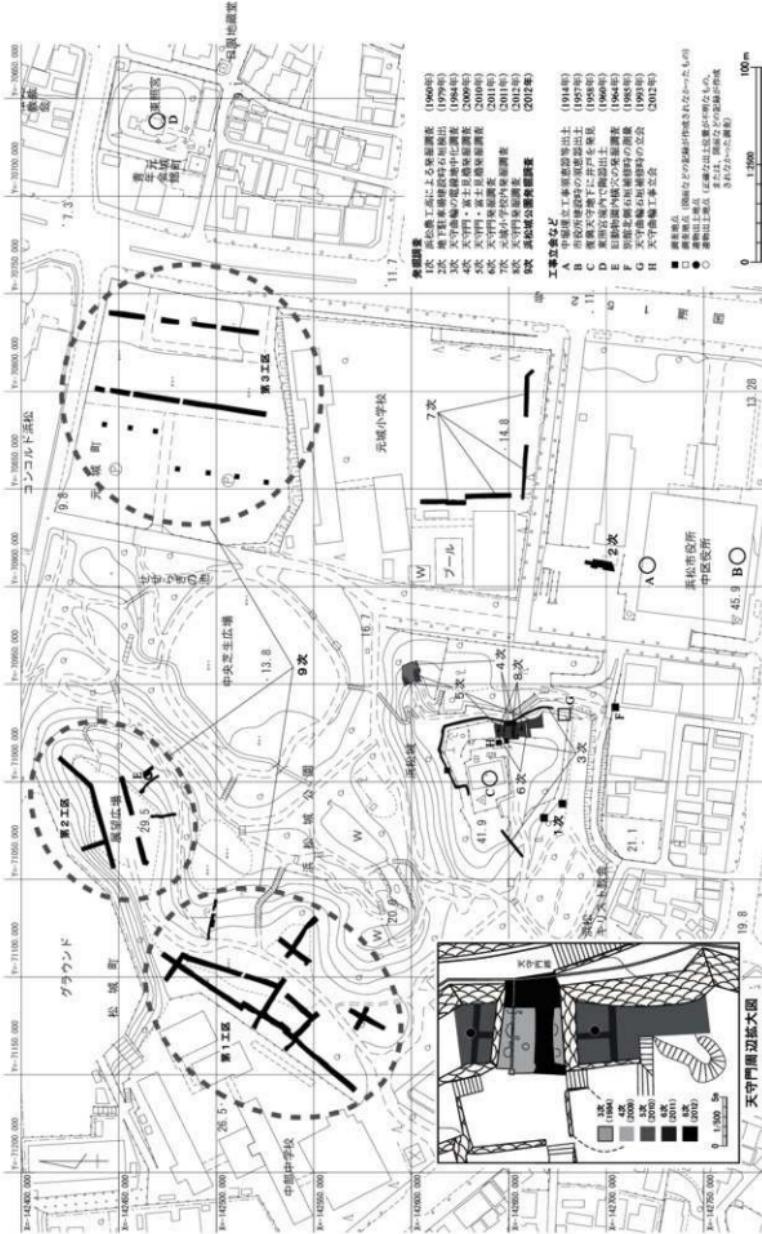
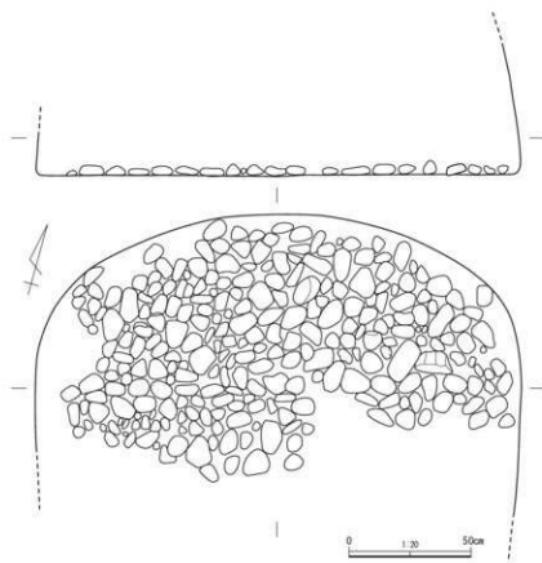
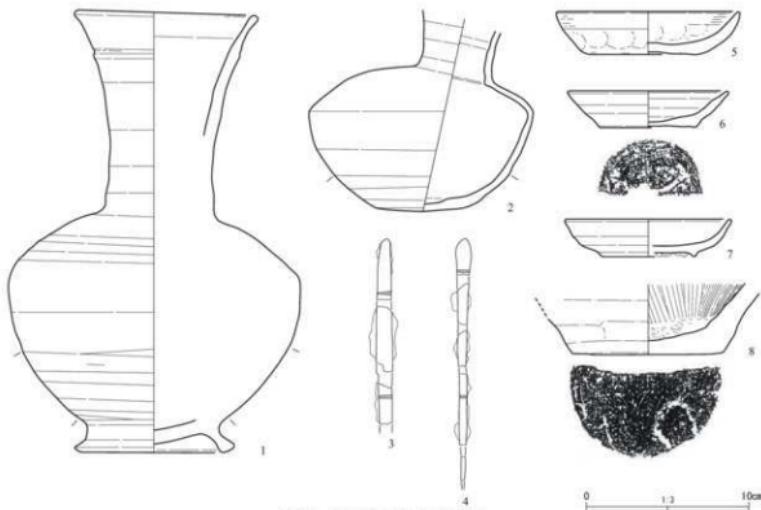


Fig.4 浜松城跡の調査履歴



第2図 作左山横穴埴実測図



第3図 作左山横穴出土遺物実測図

Fig.5 作左山横穴
幸向坂1976より改変・転載

り、第2図のような配列をしていた。また、発掘を進める過程で、境内に流入した土砂の中に、第3図5～8に図示したような中世末か近世初期の土器や陶器の破片を発見した。その出土状態は、敷石上1m以上にあって、凹みに堆積する時の特有な相をみせる灰炭層中に包含されていた。

動物園は、昭和25年(1950)に開催された子供博覧会を継承したもので、当時から動物園に勤務していた職員の話では、今回みつかった敷石と同様の円礫は、現在の山羊舎の下まで及んでいたらしい。つまり、動物園創設に際し、平坦面を作る工事で大半を失い、石垣の裏に奥部だけが残されていたわけである。

敷石の周りの壁は、疊層であるから、自然層と流入土の識別はやや難行したが、ほぼ第2図のとおりであって、敷石と周壁との間には、石積みをする空間も、その痕跡もない。しかも、平面形は遠江地域の横穴墳と共通している。また、前述の中世末か近世初期の遺物の出土状態は、横穴墳が陥没してかなり時期が経過したあと、その凹みにこれらの遺物が流入し、そのままの状態で今日まで残されていたことを示している。こうしたことから、私はこれを横穴墳を断定したのである。現存部最大幅2m、奥行き約1.2m。

動物園に保管されていた古い焼物というのは、第3図1・2に示す須恵器2点であった。その正確な出土位置は判らないが、私の調査前に出土しているから、奥壁より1m以上はなれていたはずである。敷石の間からは、刀子と鉄鎌の破片を得た。

長頸壺(1)は、器高27.2cm、口径11.3cm、頸部径6.8cm、胴径18cm、高台径10cmで、頸部の火おもてから肩部にかけて、自然釉がかかっている。

平瓶(2)は、口径部を欠失している。現存器高13.6cm、胴高8.9cm、胴径14cm。これにも自然釉が認められる。

刀子(3)と鉄鎌(4)は断面であり、刀子は刀幅9mm、重ね2.5mmで、1本分と思われる。鉄鎌はのみ矢式らしい總先と他に断片が数点あり、2本分と思われる。

以上5点が横穴墳当初の副葬品であるが、既述したように、敷石上1m以上のところから出土した遺物群が若干存する。主なものを第3図5～8に示した。5と6は土師質の皿で、内面口辺近くに油かすが付着しており、燈明皿であったことが知られる。7は黄緑色の灰釉が厚く塗布されている陶質の小皿である。8は常滑焼のすり鉢の底部破片で、16本の粗い櫛目がついている。別に11本の例もある。この他、図示しなかったが、土鍋の破片も含まれている。

長頸壺の口辺下に沈線を1条めぐらし、これにわずかな段をつけて、口唇部を薄くすること、肩部に丸みをつけること、底に高台を付けること等は、須恵器第IV期の特徴のように思うし、平瓶の形も第III期の終りごろか第IV期のものに共通するようである。刀子や鉄鎌からは何ともいえないが、この横穴墳の年代観としては、7世紀中葉をあてるのが妥当と思う。

4 調査の経過

発掘区設定 浜松城公園における今回の調査は遺構の残存状況を把握するため、園内の丘陵部で旧動物園にあたる作左の森を第1工区、展望広場を第2工区、低地部で旧体育館にあたる公園駐車場及び芝生広場を第3工区として調査区を設定した。第1工区は4箇所の小工区にからなり、丘陵

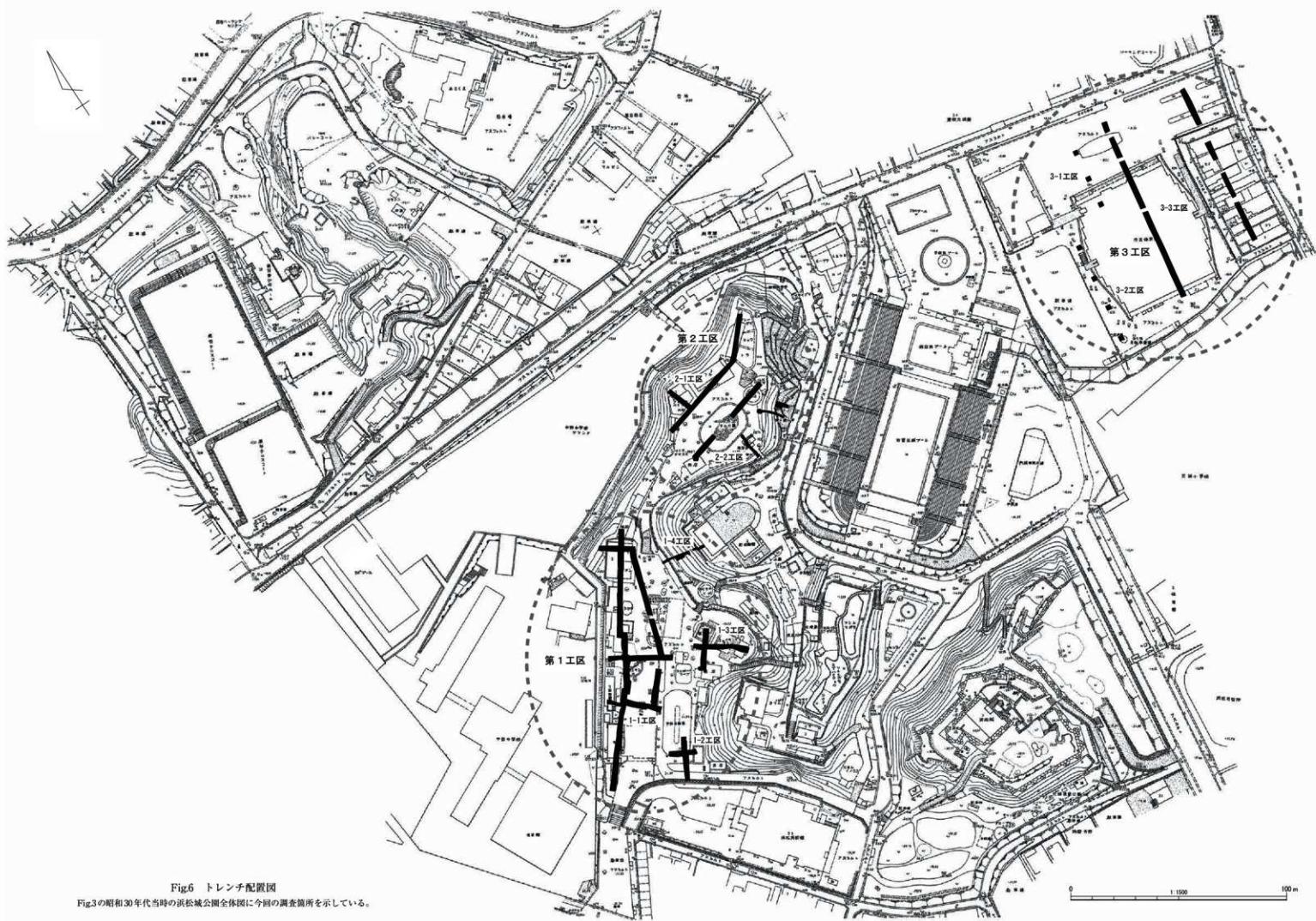


Fig.6 レンチ配置図

Fig.3の昭和30年代当時の浜松城公園全体図に今回の調査箇所を示している。

尾根方向に縦断トレントを4箇所、直交する横断トレントを5箇所、南側斜面地にトレントを1箇所の配置にした。第2工区は2箇所の小工区からなり、2-1工区で丘陵尾根方向に縦断トレントを3箇所、直交する横断トレントを1箇所、2-2工区で南側斜面地にトレントを3箇所の配置にした。第3工区は3箇所の小工区からなり、3-1、3-2工区の駐車場は利用者の配慮から小規模のグリッドを7箇所、3-3工区の芝生広場は南北方向に横断するトレントを3箇所配置した。測量にあたっては国家座標を採用し、浜松城公園内に設けられた基準点をもとに計測を行なった。なお、遺構番号は小工区ごとにつけた。

調査経過 調査は10月1～3日に事務所設営および調査機材搬入などの準備作業を行い、10月4日から第1工区よりトレントを配置し掘削を開始した。平坦部のトレントは表土や造成土を重機で掘削した後に、人力で地山（基盤層）を精査し遺構検出を行った。斜面地に配置したトレントは、重機の進入が困難であるため、表土掘削から遺構検出、埋め戻しに至る復旧までを人力で行った。またトレントにかかる園内の樹木、施設等はその周囲を含め安全を留意し現状のまま残した。原則として各トレントは長軸方向の壁面を精査し、土層堆積状況を確認し、写真撮影や図面等の記録を作成した。

第1工区は、旧動物園施設や現公園造成に伴う旧地形の改変がなされており、表土直下の公園造成整地層が地山層（基盤層）に及んでいた。その造成整地層の厚さは1mを越える箇所もあり、特に森林の中に配置した1-1工区は樹木保護のため掘削箇所が制限されていたこともあり、全体的に地山層まで掘り下げることができず、部分的に深掘り範囲を設定して地山層の検出を行った。第1工区では地山直上で1-1工区横断部西トレント南側と1-2工区において溝、土坑、小穴などの遺構を検出した。1-3工区では遺構の検出はなかった。10月31日より平坦部のトレント調査終了をもって重機による埋め戻しを開始し旧状に復した。また11月1日から13日まで1-4工区の斜面地において人力で掘削調査を行った。

第2工区は、11月8日から2-1工区の重機による掘削を開始した。第1工区同様に旧地形の改変が著しく、自然堆積による基本層序を把握することはきわめて困難であった。唯一、遺構の検出は斜面地に配置した2-2工区トレント5において現況位置が不明確となっていた左山横穴の一部を検出した。遺構埋土に中世以降の遺物が混在しており、過去の調査報告に掲載されている遺物と時期が重なったことから、当時に調査を担当された向坂鋼二氏の現地指導を賜わり、既往調査の横穴であることを再確認できた。埋め戻しに際しては坑内を土嚢袋で開口部まで敷き詰め養生してから排出土で埋め戻しを行った。

第3工区の3-1工区、3-2工区は、駐車場利用者の便宜から11月27日、28日の二日間で調査を行った。いずれのトレントからも地山層が確認されたが後世の掘削が深く及んでいる箇所が多く、検出面の標高は一定ではなかった。遺構の検出はない。29日から3-3工区の掘削を開始した。調査区の大部分において近現代の掘削工事が2m以上の深さまで及んでおり、地山層が確認できなかつた。わずかに確認できた地山層でも遺構は検出されなかつた。なお重機による埋め戻しの際に補足的にさらに深掘りを行い地山層の確認を行つた。12月14日、3-3工区の埋め戻しが完了し、17日、18日に芝生復旧を終えて、25日、現地調査の完了検査を受けた。27日までに機材の搬出、事務所の撤去、敷地搬入口復旧を行い現地作業を全て終了した。

整理・報告書作成作業は1月7日から実施した。

第2章 調査成果

1 第1工区の調査 (Fig.7～13)

土層堆積状況 第1工区は浜松城北側で谷地形を挟んだ北東に迫り出す丘陵上の付根部にあたり、作左曲輪に比定されている場所である。基本層序は、①現代の表土層（公園整地層・腐植土）、②昭和60年以降の整地層（現公園造成土）、③昭和25年～昭和57年の整地層（旧動物園造成土）、④地山層（赤褐色砂礫層もしくは黄褐色砂礫層の基盤層）の4層に大別できる。ほぼ全域において造成土直下で基盤層は露出しており、遺物包含層や旧表土の残存は確認できなかった。

検出遺構 (Fig.7～10)

1-1工区横断部西トレント南側で溝1条、土坑2基、小穴5基を、1-2工区トレントで溝1条、小穴3基を検出している。

1-1工区横断部西トレント南側 (Fig.7) 遺構はいずれも検出面が③旧動物園造成土直下である。埋土は酷似しており、同時期の遺構と考えられる。

溝 (SD01) (Fig.10) SD01は北西から南東方向へ直線に走行する溝である。主軸方向はN-52°-Wである。南東側は攪乱に切られていて不明である。検出面における規模は長さ4.97m、幅0.29～0.39m、深さ0.07～0.12mほどである。埋土は単層で、遺物は出土していない。

土坑 (SK01) (Fig.10) SK01は平面形が隅丸長方形を呈する土坑である。主軸方向はN-51°-Eである。検出面における規模は長軸0.80m、短軸0.33m、深さは最大で0.46mほどである。断面形は長軸方向に2段の階段状を呈している。他に平瓦、近代の磁器が出土しているが小片のため図化できなかった。

土坑 (SK02) (Fig.10) SK02は平面形が隅丸長方形を呈する土坑である。主軸方向はN-44°-Wである。検出面における規模は、長軸0.85m、短軸0.36m、深さ0.04mほどである。底部は平坦である。北側は樹木のため未調査である。埋土は単層で、遺物は出土していない。

小穴 (SP01～SP05) (Fig.10) SP01、SP02、SP03は平面形が円形を呈し、検出面における規模はSP01が直径0.34m、深さ0.2m、SP02が直径0.28m、深さ0.09m、SP03が直径0.45m、深さ0.33mほどである。埋土は単層で酷似している。いずれも遺物は出土していない。SP04は平面形が稍円形を呈し、検出面における規模は長軸0.53m、短軸0.35m、深さは最大で0.32mほどである。埋土は単層で、遺物は近代のクロム青磁が出土したが小片のため図化できなかった。SP05は平面形が不正円形を呈し、検出面における規模は長軸0.57m、短軸0.45m、深さは最大で0.32mほどである。埋土は単層で、遺物は近代の瀬戸・美濃系の磁器碗 (Fig.11-1・2) が出土している。

1-2工区トレント (Fig.10) 遺構はいずれも検出面が②現公園造成土直下である。埋土は酷似しており、同時期の遺構と考えられる。

溝 (SD01) (Fig.10) SD01は北西から南東方向直線に走行する溝である。主軸方向はN-57°-Wである。南東側は調査区域外へ続いている。北西側は攪乱に切られていて不明であるが、トレントの北西壁で確認されてないことから、北側への延伸はなさそうである。検出面における規模は長さ0.58m、幅0.38m、深さ0.13mほどである。断面形は逆台形で底部は平坦である。埋土は単層で遺物は出土していない。

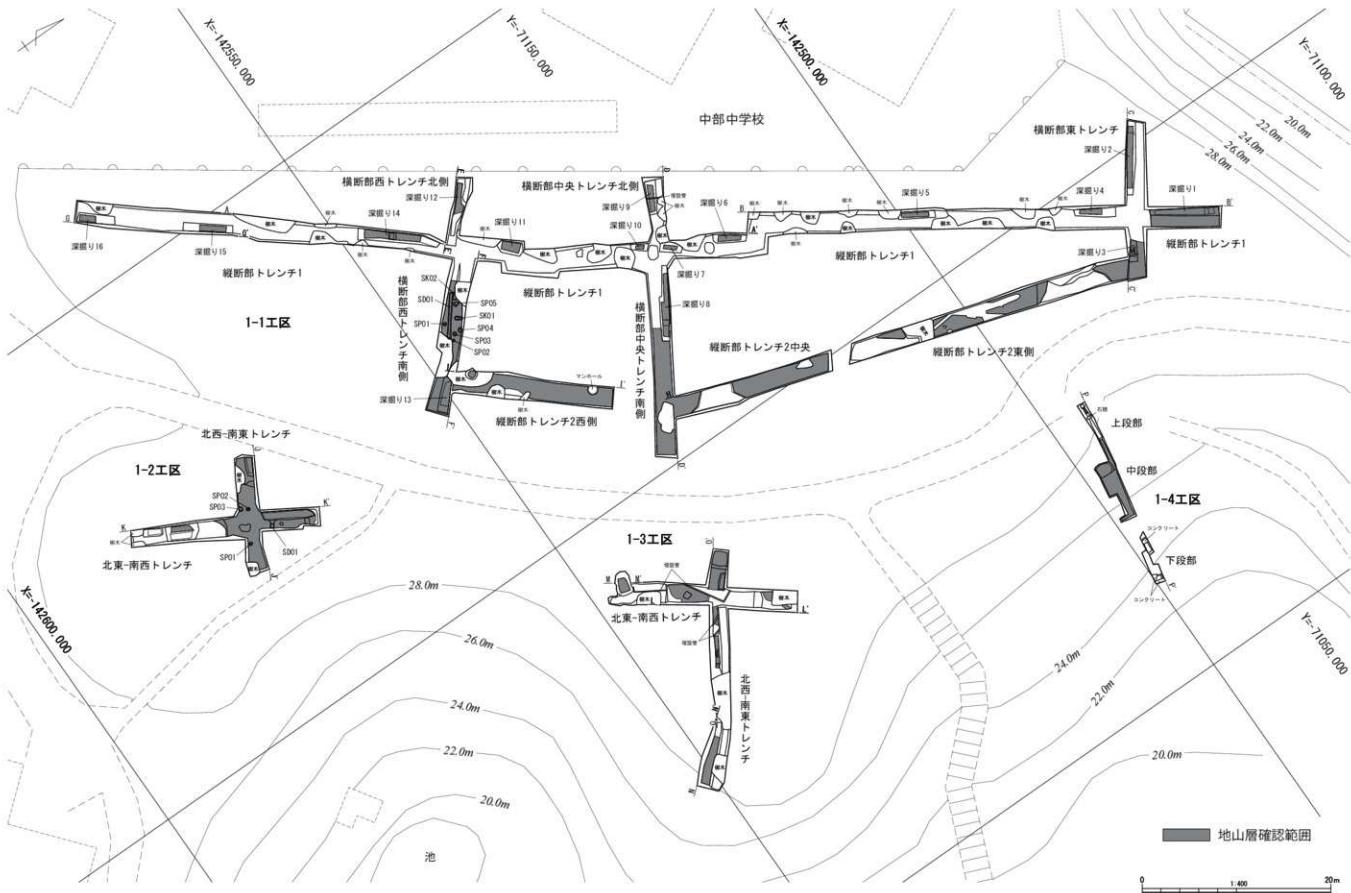


Fig.7 第1工区平面図

1-1工区

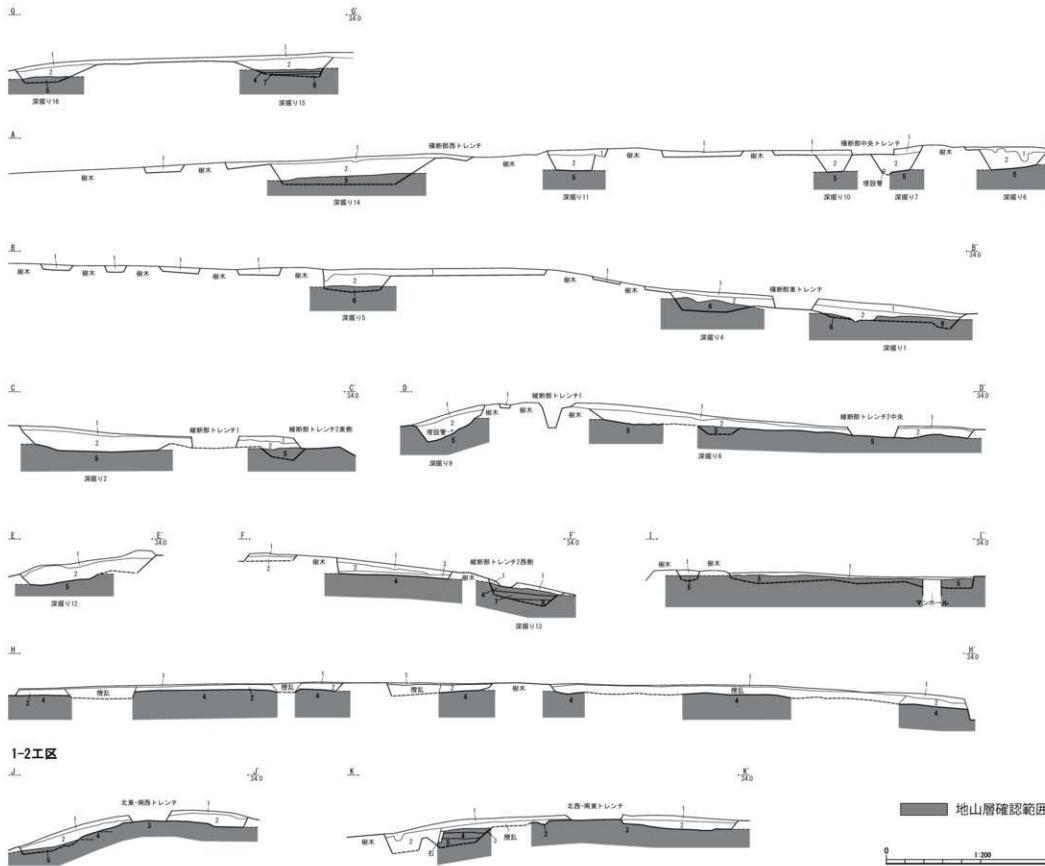
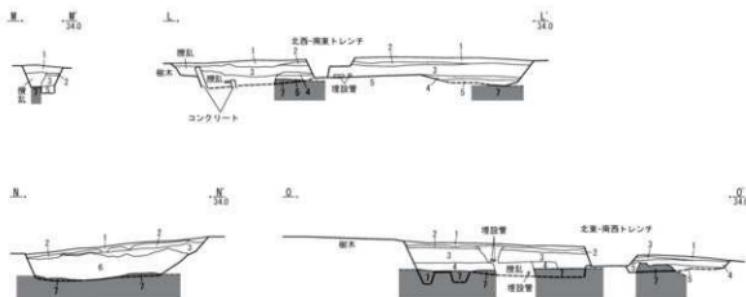
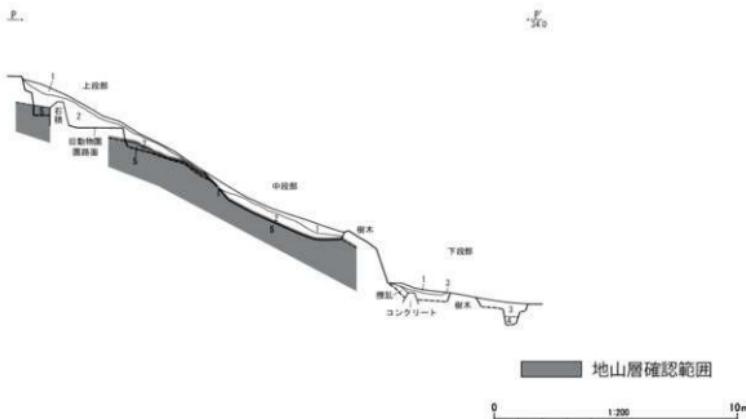


Fig.8 第1工区断面図(1)

1-3工区



1-4工区



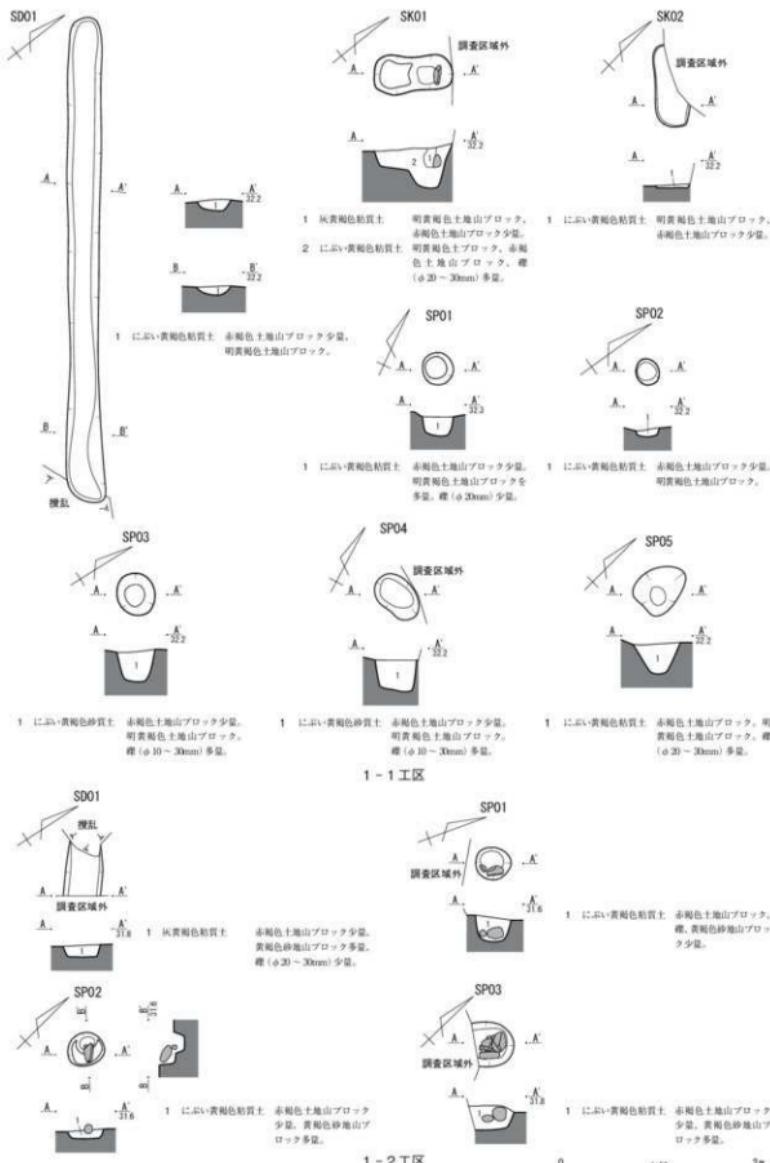
- 1-32) 各セグメント(L-L', W-W', H-H', O-O')

 - ① 現代農地
 - 1 黒泥質粘土質、底質上層。
 - 2 モリモリ透水性地盤。
 - 3 にじみ黄褐色砂質土、黃褐色砂多量。
 - 4 本泥質砂質土、底質多量、複数瓦片、コンクリート塊含む。
 - 5 旧動物園構成地盤。
 - 6 黄褐色砂質土、砂石、アスファルト片含む。
 - 7 黑泥質粘土質、素朴に感じ、コンクリート塊含む。
 - 8 駐車場砂質土、焼土、底化物、コンクリート塊、瓦片、レンガ片含む。
 - 9 地山 砂質土
 - 10 水色砂質土

- 1-4工区セシヨン(P-P')

 - ① 現代地盤
 - 1 黒褐色粘土質・腐殖土層。
 - 2 現固園成壊層
 - 3 にがい黄褐色砂質土、風化塵多量、コンクリート塊含む。
 - 3 にがい黄褐色砂質土、礫土主体、理量低。
 - 4 黑色砂質土、小塊、砂利、コンクリート塊、ビニール片、鉄板片含む。
 - 4 地山 砂質土
 - 5 小褐色砂質土

Fig.9 第1工区断面图(2)



小穴 (SP01 ~ SP03) (Fig.10) SP01、SP02は平面形が円形を呈している。検出面における規模はSP01が直径0.37m、深さ0.27m、SP02が直径0.39m、深さ0.26mほどである。SP03は平面形が梢円形を呈している。検出面における規模は長軸0.46m、短軸0.40m、深さ0.25mほどである。南東側は調査区域外へ続いている。各小穴からも自然石の根固め石が施されており、またSP02の断面形は2段の階段状を呈していることから柱穴と考えられるが、建物跡としての並びは確認はできなかった。いずれも埋土は単層で遺物は出土していないが、根固め石の状況から遺構の時期は戦国～江戸時代になる可能性がある。

出土遺物 (Fig.11 ~ 13)

1・2は1-1工区横断部西トレーニングのSP05から出土している。1は瀬戸・美濃系の銅版絵付け半筒碗である。2は瀬戸・美濃系の小碗である。

3~9は1-1工区の①表土ないしは②現公園造成整地層を切る擾乱土から出土している。いずれも近代以降に属する瀬戸・美濃系の所産である。3は白磁碗、4は小碗である。5はゴム版絵付の鉢、6は型打ち整形された鉢である。7はゴム版絵付けで「金吾製」銘がある皿である。8は植木鉢。9は陶器の鉄軸の鍋である。

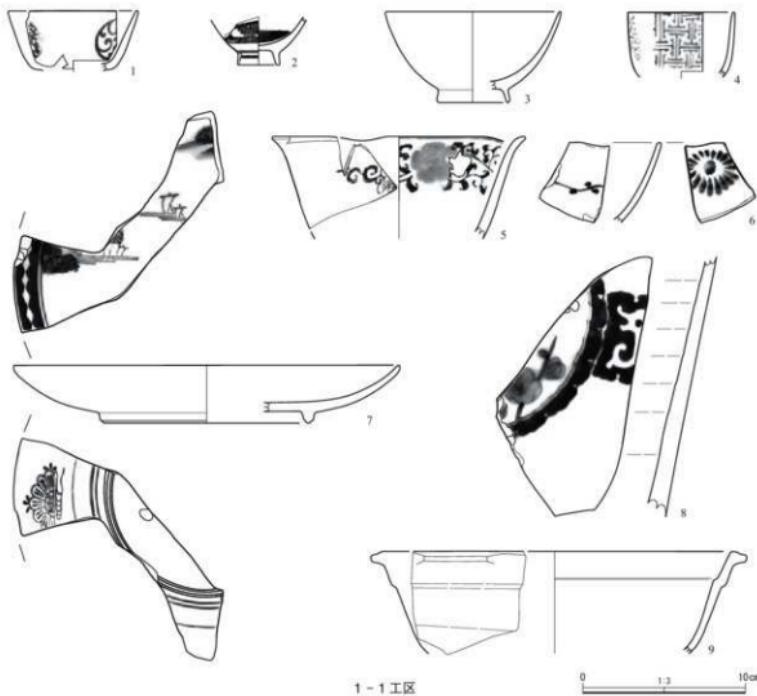


Fig.11 第1工区出土遺物 (1)

10・11は1-2工区の①表土層、②現公園造成整地層から出土している。10は18世紀代の肥前産の半球碗である。11は近代の所産で瀬戸・美濃系の染付梅文の小皿である。

12~18は1-3工区の①表土、②現公園造成整地層、③を切る攪乱土から出土している。12~17までの磁器は近代以降に属する瀬戸・美濃系の所産である。12は染付で13は銅版絵付けの碗である。14は型打ち整形された盃で見込みに「千鳥」の上絵が施されている。15は色絵盃で赤絵に「福」、「禄」、「寿」、の銘がある。二次比熱を受けている。16は皿、17は陶器の鉢である。18は枠内に「水」をあしらった鬼瓦である。時期は近代以降の所産と考えられる。

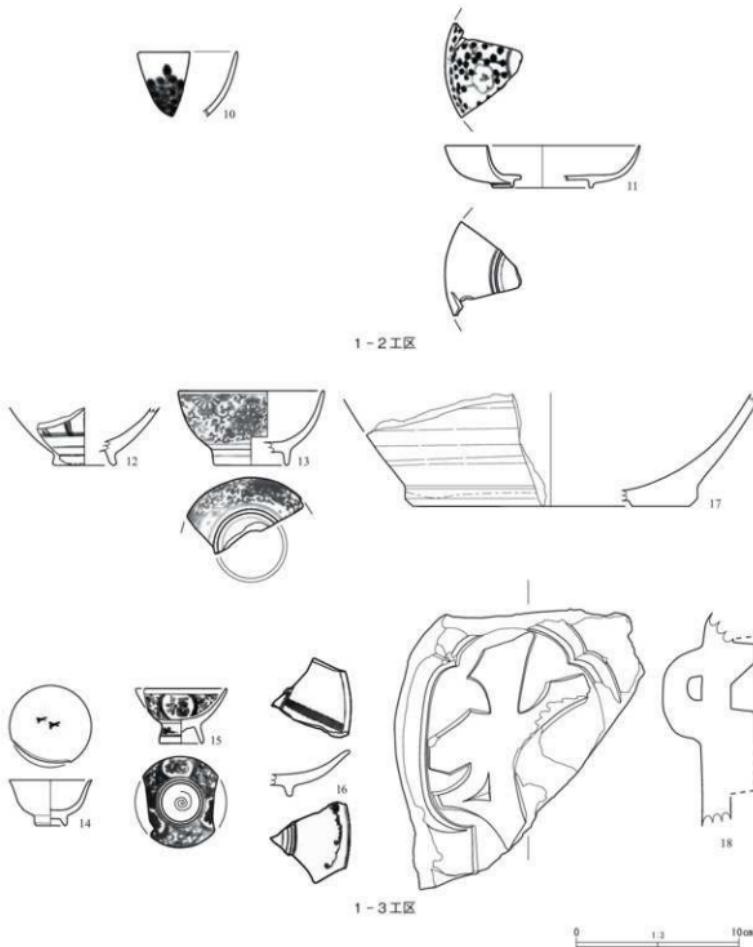


Fig.12 第1工区出土遺物(2)

19～29は1～4工区の①表土、②現公園造成整地層から出土している。19は肥前産の湯呑み碗で、高台内に「成化□製」の銘がある。19世紀前葉の製品である。20～26の磁器は近代以降に属する瀬戸・美濃系の所産である。20は銅版絵付け、21はゴム版絵付けの碗である。22は赤上絵の鏡子である。23は型紙絵付け高台無袖の皿、24は型打ち整形無袖の皿、25は洋食器の皿である。26は型打ち整形のクロム青磁である。27は焼塙壺の蓋である。板作りで、内面に布目が薄く認められる。産地は堺である。江戸遺跡では、武家地から容器とともに多量に出土している。28は鬼瓦である。時期は近代以降の所産と考えられる。29は新寛永通寶一文銭である。銭径の大きさや鑄込まれた字形から18世紀以降と推測される。

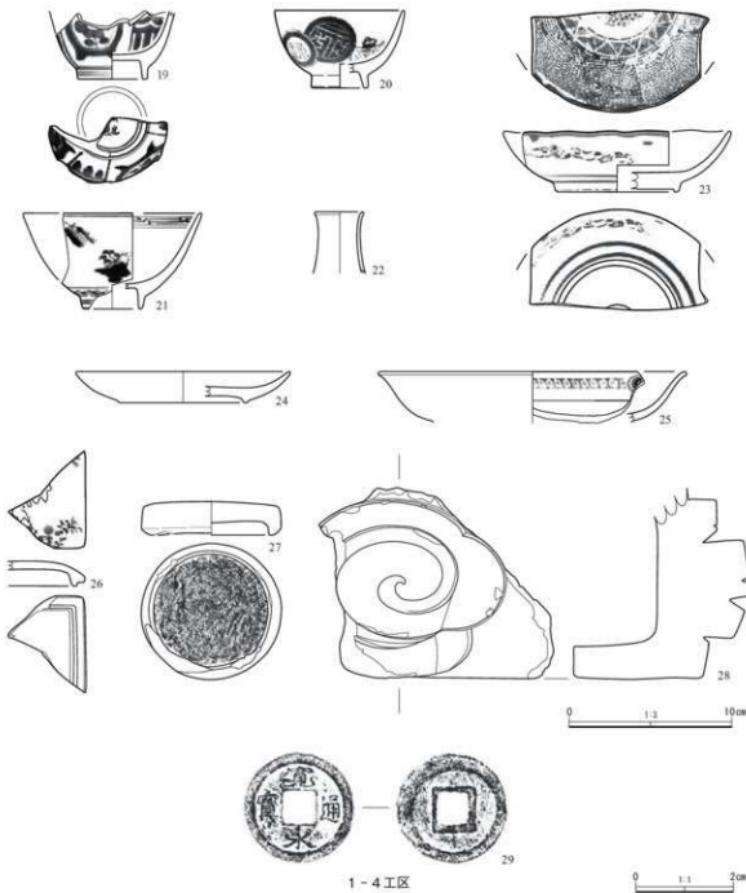


Fig.13 第1工区出土遺物（3）

2 第2工区の調査 (Fig.14 ~ 16)

土層堆積状況 第2工区は浜松城北側で谷地形を挟んだ北東に迫り出す丘陵上の先端部にあたり、作左曲輪に比定されている第1工区の北側で、尾根続きとなっている。基本層位は第1工区と同様で、①現代の表土層（公園整地層・腐植土）、②昭和60年以降の整地層（現公園造成土）、③昭和25年～昭和57年の整地層（旧動物園造成土）、④地山層（赤褐色砂礫層もしくは黄褐色砂礫層の基盤層）の4層に大別できる。ほぼ全域において造成土直下で基盤層が検出されており、遺物包含層や旧表土の残存は確認できなかった。

検出遺構 (Fig.14・15)

2 - 2工区トレント5で横穴1基を検出している。

横穴 (SM01) (Fig.14) SM01は南急斜面で検出した。1964年の調査後に詳細な位置が不明になっていた作左山横穴を再検出したものである。掘り込み面の確認は③旧動物園造成土直下である。平面形は半円形で検出面における規模は長軸1.75m、短軸0.55m、奥壁部の深さ0.76mほどである。底部は平坦である。西側は調査区域外へ続いている。埋土（7層、8層）は1964年の調査時の掘削土で埋め戻しされており、敷石に使用されたと考えられる円礫が混在していた。遺物は中世末から近世初期の陶器、かわらけが14点出土している。いずれも小片であるが6点を図化した(Fig.16-36, 39 ~ 43)。過去の調査では須恵器、鉄製品が出土しているが、今回は横穴に伴う新たな遺物は出土していない。

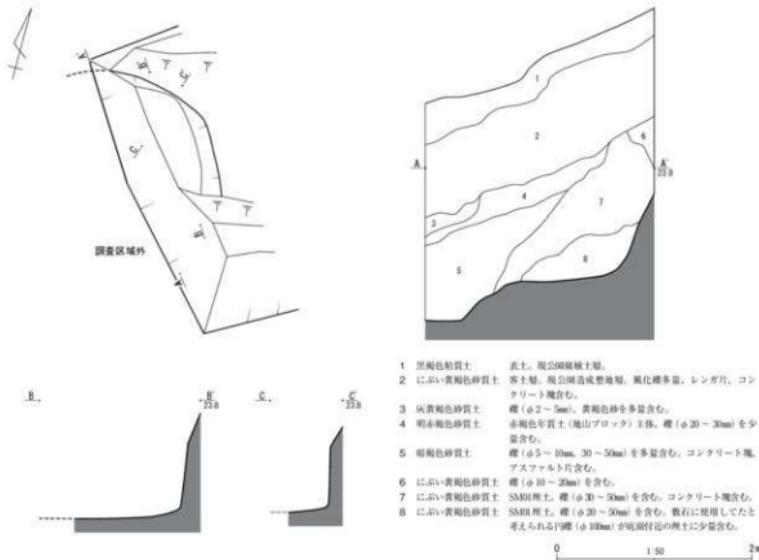


Fig.14 第2工区 作左山横穴実測図

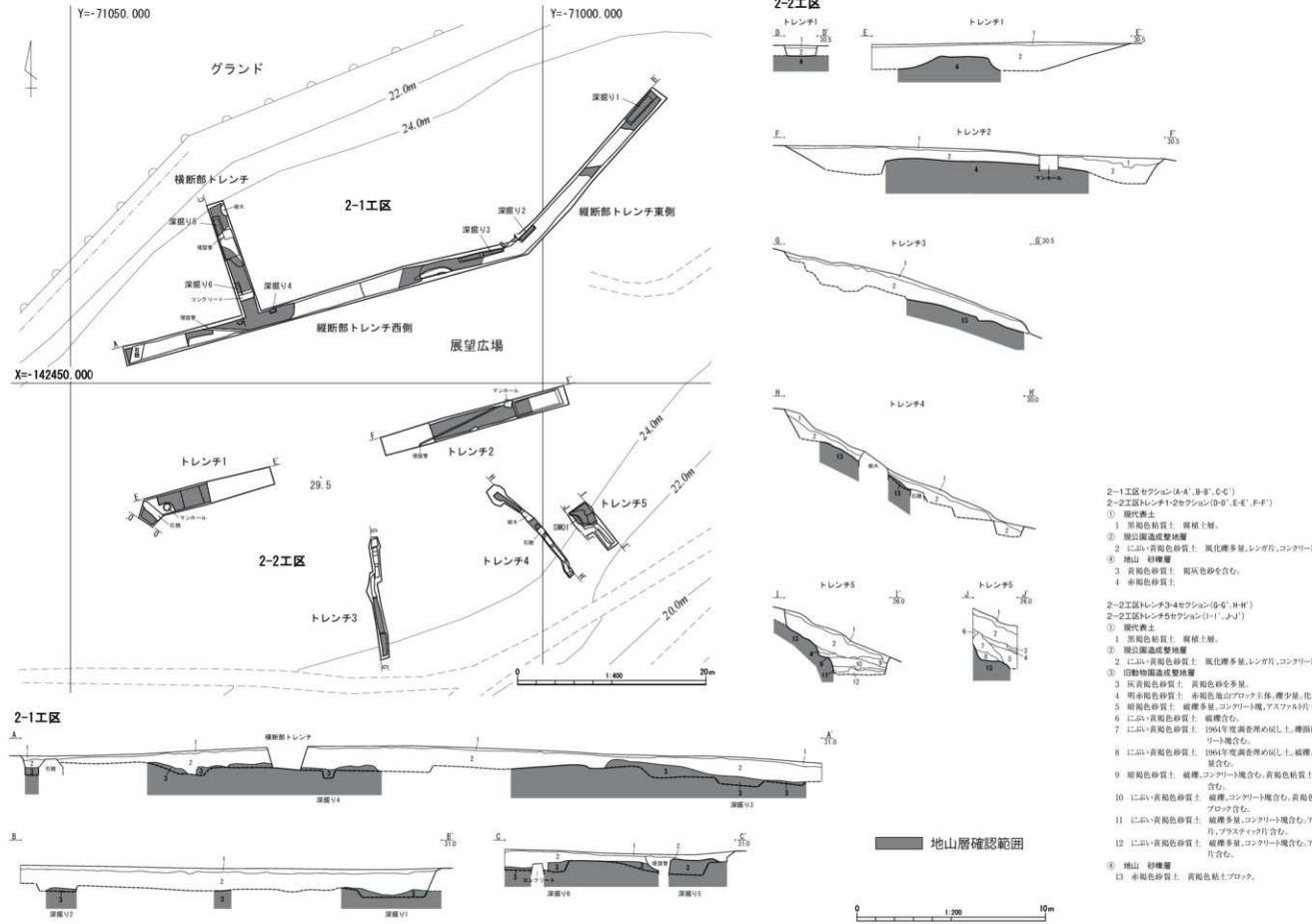


Fig.15 第2工区平面图·断面图

出土遺物 (Fig.16)

30～33は2-1工区縦断部トレンチの②現公園造成整地層を切る擾乱土から出土している。いずれも近代以降に属する瀬戸・美濃系の所産である。30は鳥の上絵付けの碗、31は染付の鉢、32は花生である。33はロクロ型打整形で外面無釉の筒蓋物である。

34～44は2-2工区トレンチ5の②現公園造成整地層である2層、③旧動物園造成整地層である7～9層から出土している。7層・8層はSM01調査時に埋め戻した埋土である。34～36・38は2層から出土しており、34は瀬戸・美濃系の蓋碗、38は陶器の湯のみ碗、38は陶器の灰釉捏ね鉢である。いずれも時期は近代以降と考えられる。44は粘板岩製の硯で時期は不明である。37は9層から出土しており、ゴム版絵付け口銚を施した碗である。39～44の遺物は7層・8層から出土している。39は陶器の鉄釉捕鉢で志戸炉焼である。40～44はかわらけである。いずれも小片で胎土は灰白色ないしは黄白色で雲母と小石が含まれている。内外面の磨耗が著しい。また42・43は外面に煤の付着がみられたことから焰烙の破片の可能もある。時期は形態的な特徴から、16世紀末頃の所産である可能性が高い。



Fig.16 第2工区出土遺物

3 第3工区の調査 (Fig.17 ~ 19)

土層堆積状況 第3工区は浜松城北側の谷地形が北東へ扇状に広がる低地部にあたり、現在は駐車場や芝生となっている。展望広場に設定した第2工区の地表面との高低差は約20mに及ぶ。基本層位は①現代の表土層(アスファルト舗装・芝生)、②近現代の造成層、③地山層(黄褐色砂礫層の基盤層)の3層に大別できる。当調査工区は特に3-3工区において表土下2mを越える造成土のため基盤層確認に至らなかった箇所は、埋め戻しの際に重機で補足的に深掘りを行っている。いずれも基盤層の確認は造成土直下であり、遺物包含層や旧表土の残存は確認できなかった。

出土遺物

45は3-1工区トレンチ3の②近現代の造成層の3層から出土している。近代以降に属する瀬戸・美濃系の所産でロクロ型打整形で銅版絵付の小碗である。

46は3-2工区トレンチ2の②近現代の造成層の2層から出土している。近代以降に属する瀬戸・美濃系の所産で縁袖の鉢である。

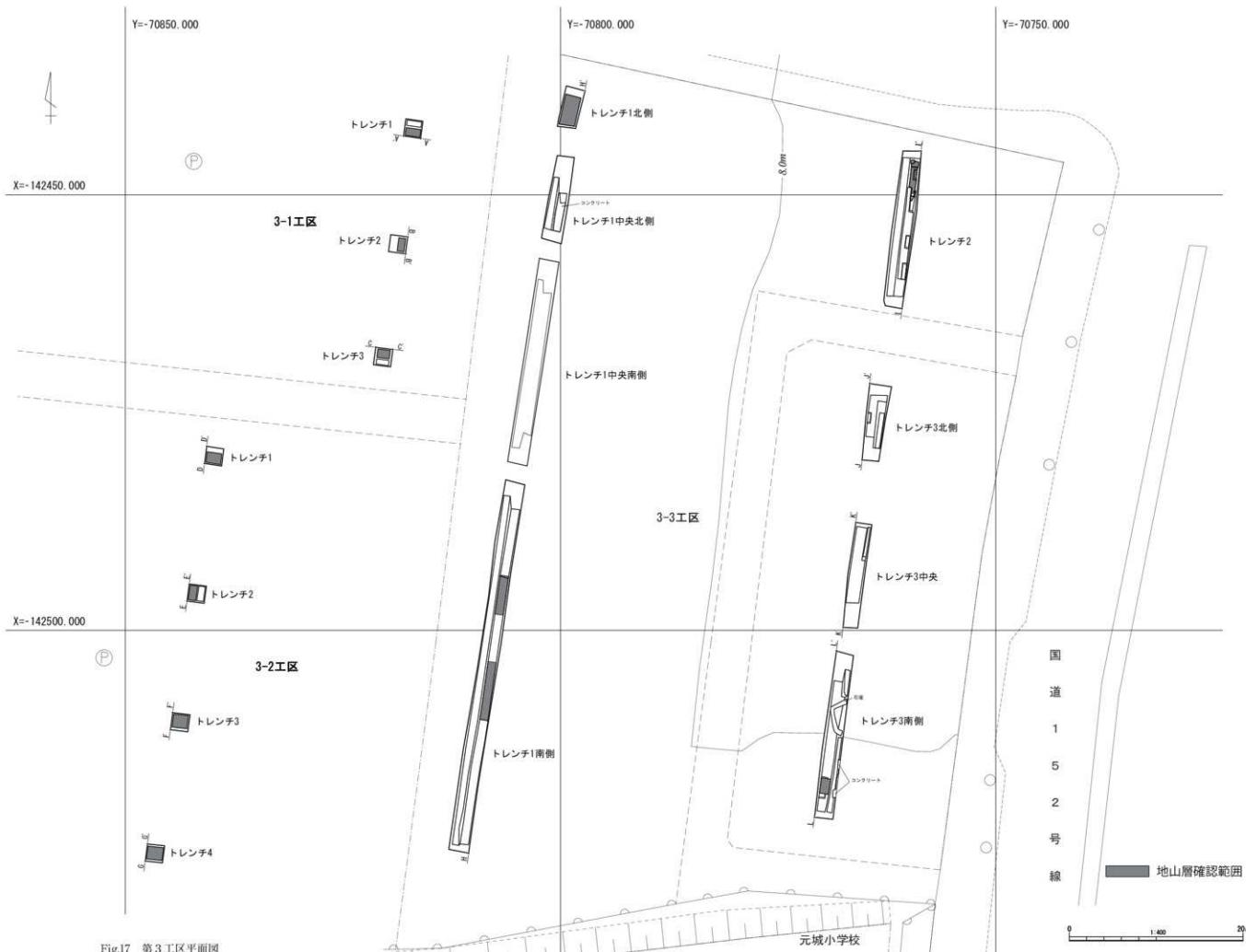
47~53は3-3工区トレンチ1の②近現代の造成層の2層から出土している。いずれも近代以降に属する瀬戸・美濃系の所産である。47は染付手描きの碗、48はロクロ型打整形でゴム版絵付の碗、49は高台削り出しの碗、50は染付唐草文の小碗である。51はロクロ型打整形の皿である。52は焼雜糞のある大皿、53は削り高台の鉢である。

54~57は3-3工区トレンチ2の②近現代の造成層の2層・3層から出土している。54は2層からの出土で、戦前(昭和前期)に属する瀬戸・美濃系の汁碗で鉄釉陶器である。

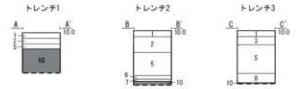
55~57は3層からの出土で、55は陶器で壺ないしは壺の破片である。56は色調が橙色で外面に布目、内面にヘラ状工具痕のある陶器である。器種は不明である。57は瓦質陶器の火消し壺である。内面に煤の付着が著しい。いずれも近代の所産である。

58~66は3-3工区トレンチ3の②近現代の造成層の2層から出土している。58・59は江戸時代に属する肥前産の染付碗である。60~66は近代以降に属する瀬戸・美濃系の所産である。60は外面に唐草文、内面に四方押文の染付碗である。61はロクロ型打整形で型紙絵付皿、62は銅版絵付で凹型高台の皿、63は染付魚波文で板作りの角皿である。64は鉄袖でわら灰釉掛け流しの陶器の鉢、65・66は陶器の一升徳利で66には「本通」の銘が入っている。

67は3-3工区トレンチ2の②近現代の造成層の2層から出土している、須恵器壺の底部である胎土は軟質である。時期は不明である。



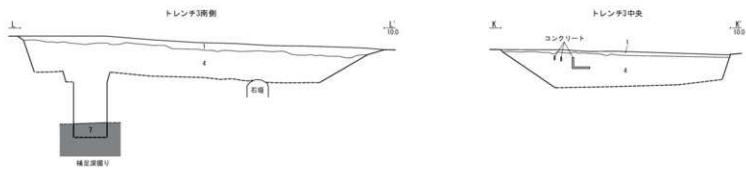
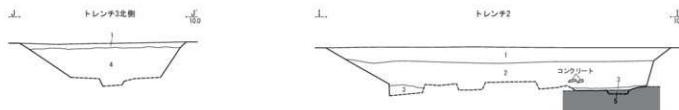
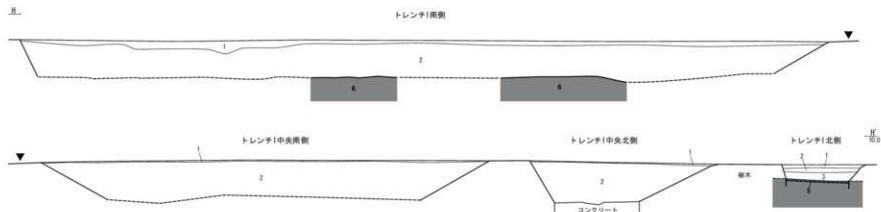
3-1工区



3-2工区



3-3工区



3-1工区セクション「A-A'・B-B'・C-C'」

3-2工区セクション「D-D'・E-E'・F-F'・G-G'」

① 現代表土

1 アズキカラ砂利土

② 観察断面整理地層

2 青灰色砂質土、現代瓦片、コンクリート塊、レンガ片含む。

3 黄褐色砂質土、現代瓦片、コンクリート塊、レンガ片含む。

4 黄褐色砂質土、黄褐色砂地山プロック、現代瓦片、コンクリート塊、砂多量。

5 黄褐色砂質土、現土。

6 黄褐色砂質土、現土。

7 布状灰色砂質土、黄褐色砂地山プロック。

8 黄褐色砂質土、コンクリート塊。

③ 地山 砂礫層

9 黄褐色砂質土。

3-3工区セクション「H-H'・I-I'・J-J'・K-K'・L-L'」

① 現代表土

1 にじい黄褐色砂質土、芝生、黄褐色砂土。

② 観察断面整理地層

2 黄褐色砂質土、現代瓦片、コンクリート塊、レンガ片、磚多量、黄褐色地山プロック多量。

3 黄褐色砂質土、現代瓦片、コンクリート塊、レンガ片。

4 黄褐色砂質土、現代瓦片、コンクリート塊、レンガ片、磚多量、黄褐色地山プロック多量。

③ 地山 砂礫層

5 黄褐色砂質土。

6 青灰褐色砂質土、グレイカル化した砂礫層。

7 黄褐色砂質土、細灰色砂多量、磚少量。

■ 地山層確認範囲

0 10m 1:200

Fig.18 第3工区断面図

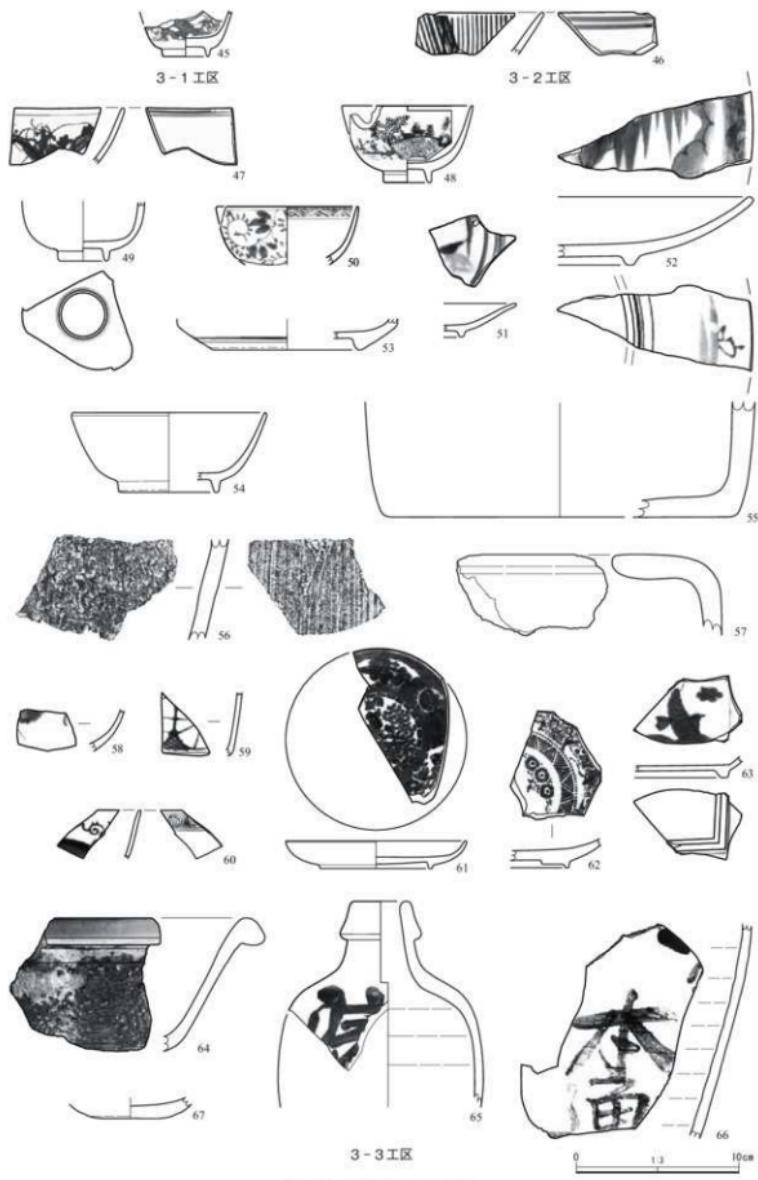


Fig.19 第3工区出土遗物

Tab.1 出土遺物観察表

Fig.	番号	取上番号	工区	トレンチ	遺構	解説	種別	反転	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	備考
11	1	5	1-1	横断部西	SP05	-	磁器	千鳥縞	反	8.0	3.7	瀬戸・美濃系 脊板貼付 家紋?
11	2	5	1-1	横断部西	SP05	-	磁器	小綱	反	29	26	瀬戸・美濃系 染付 近代
11	3	8	1-1	横断部中央	複数	磁器	白山紋	反	10.8	5.6	4.3	瀬戸・美濃系 近代
11	4	17	1-1	横断部2	1	磁器	小綱	反	6.6	4.0	瀬戸・美濃系 上絵 近代	
11	5	8	1-1	横断部中央	複数	磁器	鉢	反	15.7	6.3	瀬戸・美濃系 ゴム版貼付 花・唐草文 1920年代~	
11	6	2	1-1	横断部1'	1	磁器	鉢	反	48	48	型打 染付 上絵 近代	
11	7	8	1-1	横断部中央	複数	磁器	皿	反	23.8	3.6	12.8	瀬戸・美濃系 ゴム版貼付 「余音」 花 1920年代~
11	8	16	1-1	横断部2'	1	磁器	植木鉢	反	16.1	16.1	瀬戸・美濃系 染付 近代	
11	9	17	1-1	横断部2	1	陶器	鍋	反	22.0	6.3	瀬戸・美濃系 跡板 肩部ス付看 近代	
12	10	11	1-2		1	磁器	平底鉢	反	40	40	肥前 染付 18世紀	
12	11	9	1-2		2	磁器	小皿	反	12.0	2.6	6.1	瀬戸・美濃系 文様 近代
12	12	15	1-3		2	磁器	碗	反	36	3.6	染付 近代	
12	13	15	1-3		2	磁器	碗	反	9.0	4.6	4.5	瀬戸・美濃系 染付 脚付 1890年代~
12	14	15	1-3		2	磁器	歪	反	5.1	2.8	1.8	瀬戸・美濃系 型打 見込み「子島」 上絵 近代
12	15	15	1-3		2	磁器	色絵蓋	反	5.6	3.4	2.6	赤絵 「福 寿 寿」 跡高台内「」 跡 二次作近代
12	16	15	1-3		2	磁器	皿	反	27	27	瀬戸・美濃系 染付 近代	
12	17	12	1-3		複数	陶器	鉢	反	7.0	17.0	瀬戸・美濃系 染付 近代	
13	19	37	1-4	中・下段部	1	磁器	湯のみ	反	43	4.4	肥前 染付 高台内「化成口継」甚 19世紀(江戸)	
13	20	31	1-4	上段部	1	磁器	鉢	反	8.0	4.8	3.4	脚板貼付 1890年代~
13	21	35	1-4	上段部	1	磁器	碗	反	11.0	5.9	3.6	ゴム版貼付 外面山水文 1920年 代~
13	22	38	1-4	中・下段部	2	磁器	調子	反	3.0	3.8	瀬戸・美濃系 未上絵 近代	
13	23	38	1-4	中・下段部	2	磁器	皿	反	14.0	3.8	7.3	瀬戸・美濃系 純紙貼付 高台無脚 1880年代~
13	24	38	1-4	中・下段部	2	磁器	皿	反	13.2	1.9	7.9	型打 黒付 無脚 近代
13	25	37	1-4	中・下段部	1	磁器	皿(洋食器)	反	18.9	3.1	瀬戸・美濃系 上絵 近代	
13	26	35	1-4	上段部	1	磁器	段重蓋	反	1.5			クロム青磁 型打 イッチン 製鉄 上絵 60(見) (8)(幅) 1880年代~
13	27	36	1-4	上段部	2	土器	灰塗蓋釜	反	8.6	2.2	厚紙 板作付 18世紀	
16	30	41	2-1	横断部	複数	磁器	碗	反	3.4			瀬戸・美濃系 上絵贴 烏?
16	31	43	2-1	横断部	複数	磁器	鉢	反	5.6			瀬戸・美濃系 染付 近代
16	32	43	2-1	横断部	複数	磁器	花生	反	6.2	10.3	5.4	瀬戸・美濃系 上絵贴
16	33	44	2-1	横断部	複数	磁器	荷造物(身)	反	4.6	4.0	4.0	ロクロ型打 外面無脚 瀬戸・美濃系 近代
16	34	47	2-2	トレンチ5	2	陶器	瓦瓶(茎)	反	11.2	2.5		瀬戸・美濃系 染付 近代
16	35	49	2-2	トレンチ5	2	陶器	湯のみ	反	3.2		3.4	脚部下版「不二」刻印 相場? 近代
16	36	48	2-2	トレンチ5	2	陶器	捏ね鉢	反	8.5			瀬戸・美濃系 灰釉 近代
16	37	74	2-2	トレンチ5	9	磁器	碗	反	4.5			ゴム版貼付 口絵 1920年代~
16	39	71	2-2	トレンチ5	SM01	8	陶器	搖鉢	2.8			赤褐色 日本目 一早原 灰釉 志口呂
16	40	57	2-2	トレンチ5	SM01	7	土器	かわらけ	反	1.5	7.2	灰白色 ロクロ ソリ切り?
16	41	58	2-2	トレンチ5	SM01	7	土器	かわらけ	反	1.6	5.0	灰白色
16	42	70	2-2	トレンチ5	SM01	8	土器	培塔?	反	32	黄白色 外面スヌス付看	
16	43	70	2-2	トレンチ5	SM01	8	土器	培塔?	反	31	黄白色 外面スヌス付看	
16	44	64	2-2	トレンチ5	SM01	7	土器	不明	反	3.8	黄白色	
19	45	51	3-1	トレンチ3	3	磁器	小綱	反	2.8		2.7	瀬戸・美濃系 脊板貼付 ロクロ 型打 俊文 1800年代~
19	46	54	3-2	トレンチ2	2	磁器	鉢	反	26			瀬戸・美濃系 緑繪 染付 近代
19	47	56	3-3	トレンチ1	2	磁器	碗	反	3.5			瀬戸・美濃系 染付 手描 近代
19	48	67	3-3	トレンチ1北	2	磁器	碗	反	8.0	4.7	2.8	瀬戸・美濃系 ゴム版貼付 ロクロ 型打 黒釉 山文 1920年代~
19	49	67	3-3	トレンチ1北	2	磁器	碗	反	3.7		2.9	瀬戸・美濃系 脊板貼付 高台 花瓶文 1条 近代
19	50	56	3-3	トレンチ1	2	磁器	小綱	反	8.8	3.6		瀬戸・美濃系 染付 唐草文 近代
19	51	67	3-3	トレンチ1北	2	磁器	皿	反	2.1			瀬戸・美濃系 ロクロ型打 染付 近代
19	52	56	3-3	トレンチ1	2	磁器	大皿	反	4.2			瀬戸・美濃系 創始 高台 近代
19	53	56	3-3	トレンチ1	2	磁器	鉢	反	1.9	9.0		染付 創始 高台 近代
19	54	76	3-3	トレンチ2	2	磁器	碗	反	12.0	4.9		瀬戸・美濃系 黒釉 戲戯の神鏡 舞殿と開闇
19	55	84	3-3	トレンチ2南	3	陶器	吸or蓋	反	7.1		10.5	黄白色 吸鉢 吸器 近代
19	56	83	3-3	トレンチ2北	3	陶器	不明	反	6.2			橙色 外面布目 内面ハラ工具 布器 近代

Fig.	番号	取上番号	工区	トレンド	層位	種別	断面	反転	口径 (cm)	厚高 (cm)	底径 (cm)	備考
19	57	82	3-3	トレンド 2	3	陶器	火消し 縞?			5.0		灰色 内面スス付着 瓦質陶器 近代
19	58	77	3-3	トレンド 3	2	陶器	縞			26		肥前 染付 18~19世紀
19	59	77	3-3	トレンド 3	2	陶器	信濃			29		肥前 染付 18~19世紀
19	60	77	3-3	トレンド 3	2	陶器	縞			30		染付 外面唐草 内面西方博文 近代
19	61	77	3-3	トレンド 3	2	陶器	縞 反		11.1	17	6.9	瀬戸・美濃系 ロクロ蟹打 壁瓶貼付 1880年代~
19	62	77	3-3	トレンド 3	2	陶器	縞			18		鶴瓶貼付 門型高台 1890年代~
19	63	77	3-3	トレンド 3	2	陶器	角縞			13		板作り 染付 魚波文 長さ(66) 幅(4.2) 近代
19	64	69	3-3	トレンド 3	2	陶器	体			82		長桶 わら床地掛け流し 近代
19	65	69	3-3	トレンド 3	2	陶器	一升懶利		31	127		瀬戸・美濃系 肩文字? 器径(126) 近代
19	66	78	3-3	トレンド 3	2	陶器	一升懶利			121		瀬戸・美濃系 外面文字染付 「本通」 花代
19	67	79	3-3	トレンド 2	2	粗挽器	縞 反			12	4.0	灰白色

Tab.2 瓦観察表

Fig.	番号	取上番号	工区	トレンド	層位	種別	断面	長さ (cm)	幅 (cm)	厚み (cm)	色調	備考
12	18	15	1-3		2	瓦	鬼瓦	17.2	15.3	5.7	暗灰	手捻 貼付 種内「水」 近代
13	28	34	1-4	上段部	1	瓦	鬼瓦	11.7	14.5	10.8	暗灰	雲文様

Tab.3 錢貨観察表

Fig.	番号	取上番号	工区	トレンド	層位	種別	断面	外径 (cm)	穿孔 (cm)	厚み (cm)	重量 (g)	備考
13	29	40	1-4	下段部	1	銅製品	錢貨	2.2	0.6	0.1	2.38	新慶永通實一文銭 無背 18c以降

Tab.4 石製品観察表

Fig.	番号	取上番号	工区	トレンド	層位	種別	断面	長さ (cm)	幅 (cm)	厚み (cm)	重量 (g)	備考
16	38	47	2-2	トレンド 5	2	石製品	礎	9.6	6.4	1.3	141.2	粘板岩

第3章 総括

1 作左曲輪周辺について（第1・2工区）

作左曲輪について 作左曲輪は、浜松城北西側の丘陵に位置する曲輪で、「家忠日記」の天正7年（1579）2月に「本田作左衛門尉かまへの普請」（家忠日記）とあり、武田軍の侵攻に備えるため、徳川家康の重臣の一人である本多作左衛門重次が整備したと考えられている。なお、作左曲輪の位置する丘陵は、西側がすでに削り取られて現在中学校敷地となっている。残された東側が以前は動物園、現在は浜松城公園内の「作左の森」として利用されており、今回の調査対象地（第1工区）にある。

今回の調査では、作左曲輪に比定される第1工区及びその北側の第2工区の丘陵上は、動物園や近代以降の開発によって平坦に造成され、その後の公園整備時にも大きく切土・盛土が行われていたことが判明した。これらの造成によって当時の生活面の大半は失われているが、丘陵南側の一部（第1工区南部）では、造成の影響が比較的少なかったため、断片的ではあるが遺構を確認することができた。1-2工区では柱穴3基などが検出された。出土遺物がなく時期を確定できないが、覆土のしまりが良く、根固め石を用いる構造などから戦国期～江戸時代頃の可能性がある。

また、2-2工区の東側斜面地で確認された作左山横穴（後述）において、前回調査時の覆土上層や、今回再確認した際の埋土中からは、戦国期のかわらけや陶器類が出土している。これらの遺



Fig.20 作左曲輪推定地と調査成果

物は丘陵上からの流れ込みによる可能性が高く、作左曲輪の北側である第2工区の丘陵上(=現展望広場)においても、当時の生活面は失われているものの、戦国期に何らかの活動の場であったと考えてよいだろう。

作左山横穴について 作左山横穴は、昭和39年(1964)に当時の動物園のヤギ舎の整備時に偶然発見されて調査が行われている(調査内容や横穴の詳細は第1章参照)。調査後横穴は埋め戻されていたが、動物園が移転し、公園へと変わる過程でヤギ舎周辺一帯は埋め立てられ、横穴の正確な位置は不明になってしまった。

今回の調査では、2-2工区の東側斜面地にトレーナーを3本掘削して、そのうちの1本で作左山横穴の一部を再検出することができた。今回他の横穴は確認されなかつたが、7世紀代の横穴は群集する例が多いため、造成の影響の少ない斜面地に未確認の横穴が存在する可能性は十分に考えられる。

2 二の丸北側について(第3工区)

二の丸(現元城小学校敷地など)の北側は一段低くなつており、現在は浜松城公園の駐車場及び芝生広場として使用されている。以前は体育館(昭和38年落成)が建設されており、さらに旧体育館建設前には民家や工場等が立ち並んでいた。

江戸時代末頃の「遠州浜松城下絵図」では、この場所は「深田」と記載されているが、本丸や二の丸の北側から古城(引馬城、現在の東照宮)にかけて堀が延びていた可能性も考えられるため、今回調査を実施した(第3工区)。

調査の結果、体育館や、それ以前の造成等の工事によって、地山面を深く掘り込むような掘削が広い範囲で行われていたため、遺構やそれに伴う遺物は確認できなかつた。トレーナー調査で掘削できる深度にも限界があり、地山層の検出ができなかつた箇所もあるが、調査区北・西側において地山検出面が高い傾向がみられ、3-3工区トレーナー1南側では地山層がグライ化している状況が確認された。したがつて、堀の有無は不明だが、谷状の湿地が二の丸北側に広がつてゐたことは確かである。

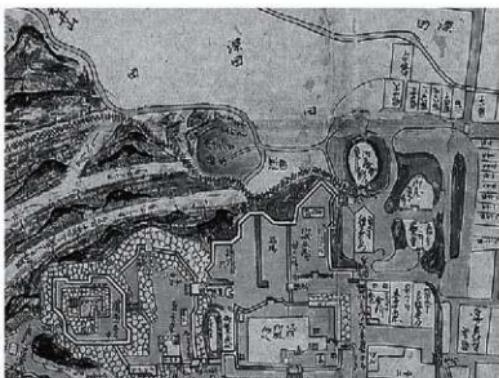


Fig.21 遠州浜松城下絵図(二の丸北側を拡大)



Fig.22 二の丸北側における調査成果

3 結 語

今回の調査は、これまで未調査であった作左曲輪周辺や、二の丸北側における遺構の残存状況を確認することを目的に実施し、いずれの調査区においても近現代の開発行為によって広い範囲で遺構確認面が失われていることが判明した。

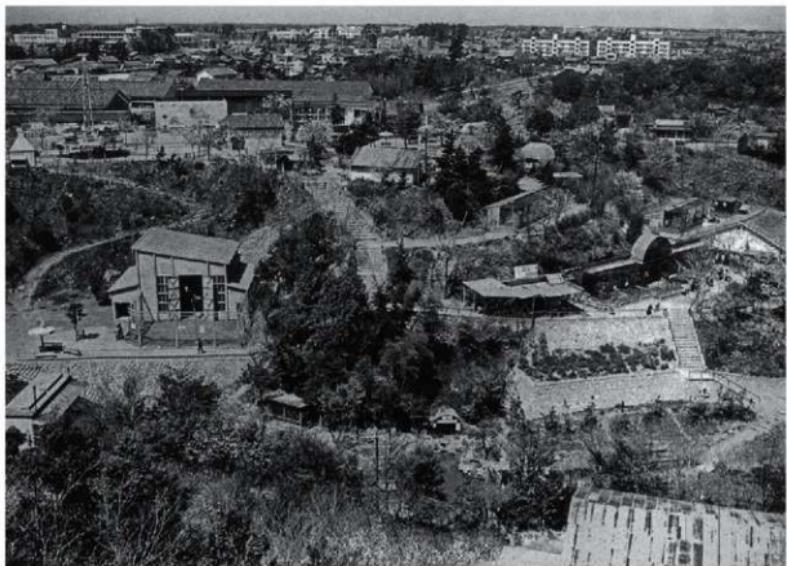
ただし、遺構が検出された作左曲輪南部や、作左山横穴を再確認することができた斜面地周辺など、原地形を留めている箇所も存在しており、その周辺には未確認の遺構・遺物が残存している可能性がある。

参考文献

- 向坂鋼二 1976 「浜松市動物園内作左山横穴埴」『森町考古10』 pp.113-116.
- 浜松市博物館 1995 「浜松城のイメージ」
- 浜松市教育委員会 1996 「浜松城跡－考古学的調査の記録－」
- 浜松市観光コンベンション課 2003 『家康と浜松城を考える』
- (財) 浜松市文化振興財団 2010・2011・2012 「浜松城跡4次」「浜松城跡5次」「浜松城跡6次」「浜松城跡7次」
- 浜松市役所市民部文化財課 2011 「浜松城と城下をめぐる」浜松市文化財ブックレット5



1 第1工区・第2工区遠景 南東から（復興天守から ▼：第1工区 ▽：第2工区）



2 昭和35年 旧動物園 南東から（復興天守から）。



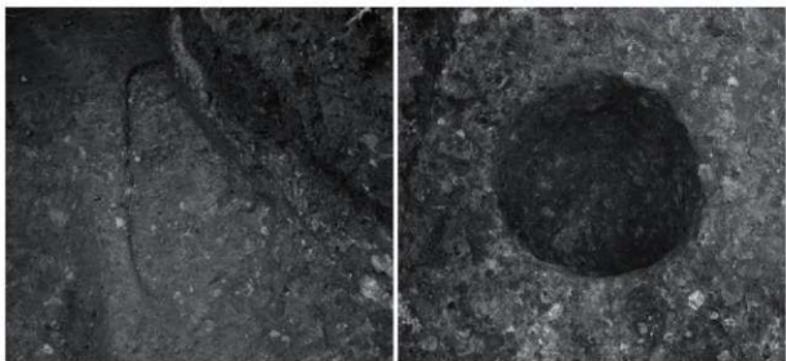
1 1-1 工区横断部西トレンチ 遺構全景 南東から



2 1-1 工区 SD01完掘 南東から

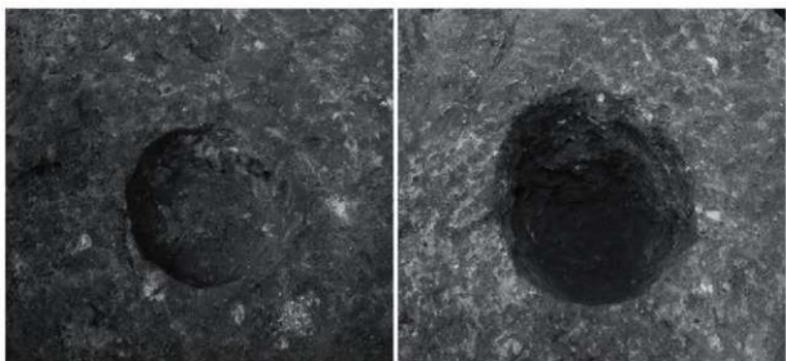


3 1-1 工区 SK01検出 南西から



1 1-1 工区 SK02 完掘 南東から

2 1-1 工区 SP01 完掘 南東から



3 1-1 工区 SP02 完掘 南東から

4 1-1 工区 SP03 完掘 南東から



5 1-1 工区 SP04 完掘 南東から

6 1-1 工区 SP05 完掘 南東から



1 1-2工区 遣構全景
北西から



2 1-2工区 SD01完掘 北西から



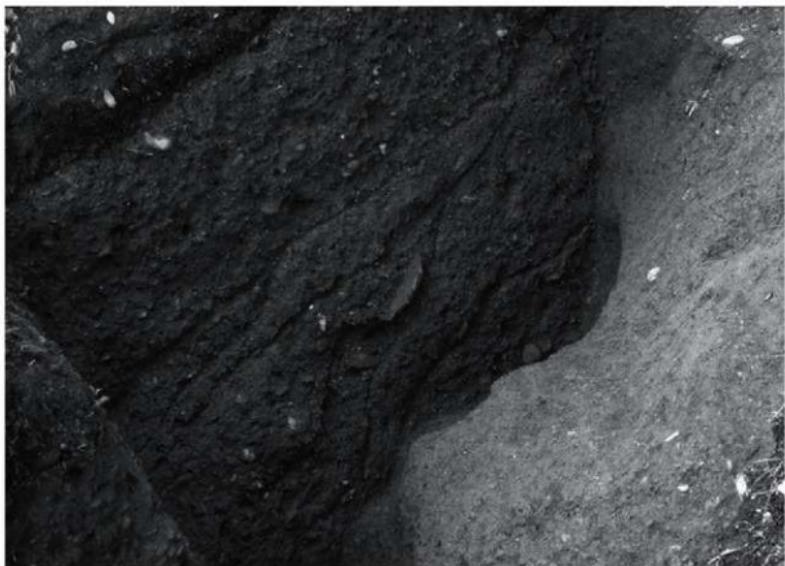
3 1-2工区 SP01完掘 南東から



4 1-2工区 SP02根固め石検出 北西から



5 1-2工区 SP03根固め石検出 北西から



1 2-2工区トレンチ5 SM01 南東から (作左山横穴)



2 2-2工区トレンチ5 SM01 南から (作左山横穴)



1 1-1工区縦断部トレンチ1
東側(深掘り1~4)全景
北東から



2 1-1工区縦断部トレンチ1
東側(深掘り5~6)全景
北東から



3 1-1工区縦断部トレンチ1
中央(深掘り6~10)全景
北東から



1 1-1工区縦断部トレンチ1
中央(深掘り10～11)全景
北東から



2 1-1工区縦断部トレンチ1
西側(深掘り14～15)全景
北東から



3 1-1工区縦断部トレンチ1
西側(深掘り15～16)全景
北東から



1 1-1工区縦断部トレンチ2
東側全景 北東から



2 1-1工区縦断部トレンチ2
中央全景 北東から



3 1-1工区縦断部トレンチ2
西側全景 北東から



1 1-1工区横断部東トレンチ
(深掘り3~2) 全景
南東から



2 1-1工区横断部中央トレンチ
南側(深掘り8) 全景
南東から



3 1-1工区横断部中央トレンチ
(深掘り9) 南西壁セクション
北東から



1 1-1工区横断部西トレンチ
南側(深掘り13)全景
南東から



2 1-1工区横断部西トレンチ
北側(深掘り12)全景
南東から



3 1-2工区北東-南西
トレンチ全景
北東から



1 1-2工区北西-南東トレンチ
南側全景 北東から



2 1-2工区北西-南東トレンチ
北側北東壁セクション
南から



3 1-2工区北東-南西トレンチ
西側北西壁セクション
東から



1 1-3工区北東-南西トレンチ
全景 南西から



2 1-3工区北西-南東トレンチ
北側全景 北西から



3 1-3工区北西-南東トレンチ
南側全景 北西から



1 1-4工区トレンチ全景 西から



2 1-4工区トレンチ下段部全景 東から



3 2-1工区縦断部トレンチ東側(深掘り1～2)
全景 南西から



4 2-1工区縦断部トレンチ西側(深掘り3～4)
全景 東から



1 2-1工区横断部トレンチ
(深掘り6～5) 全景
南から



2 2-2工区トレンチ1全景
東から



3 2-2工区トレンチ2全景
西から



1 2-2工区トレンチ3全景 南から



2 2-2工区トレンチ4上段部全景 北から



3 2-2工区トレンチ4全景 南から



4 2-2工区トレンチ5全景 南から



1 2-2工区トレンチ5東壁セクション 北西から



2 3-1工区トレンチ1南壁セクション 北から



3 3-1工区トレンチ2東壁セクション 西から



1 3-1工区トレンチ3全景
西から



2 3-2工区トレンチ1西壁
セクション 東から



3 3-2工区トレンチ2西壁
セクション 東から



1 3-2工区トレンチ3西壁
セクション 東から



2 3-2工区トレンチ4西壁
セクション 東から



3 3-3工区トレンチ1南側
全景 南から



1 3-3工区トレンチ1中央
南側全景 南から



2 3-3工区トレンチ1中央
北側全景 南から



3 3-3工区トレンチ1北側
全景 南から



1 3-3工区トレンチ2全景 南から



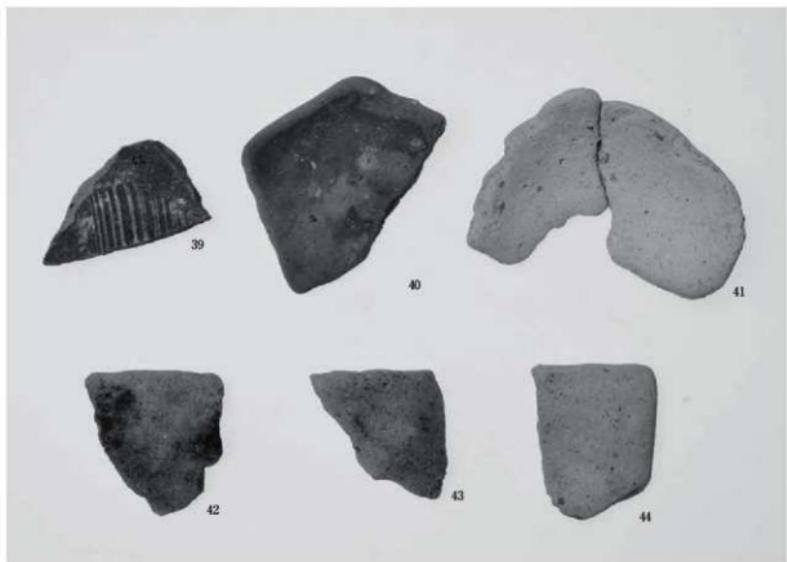
2 3-3工区トレンチ3北側全景 南から



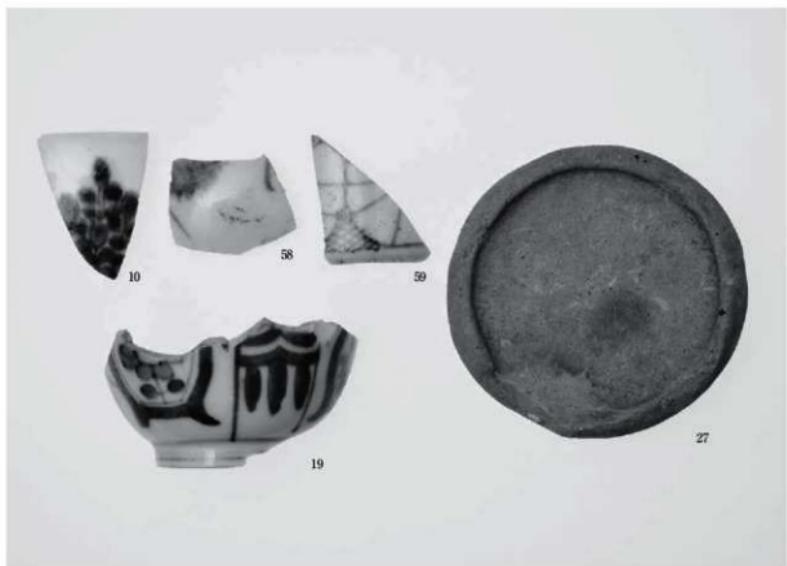
3 3-3工区トレンチ3中央全景 南から



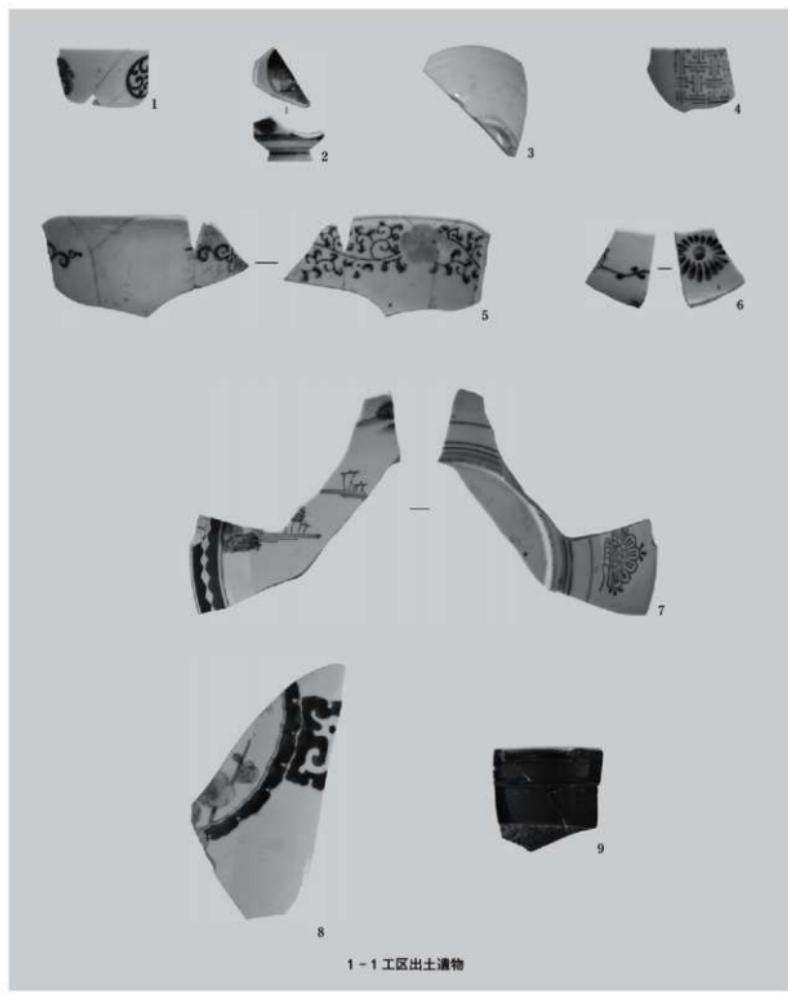
4 3-3工区トレンチ3南側全景 北から



1 戦国時代の遺物



2 江戸時代の遺物

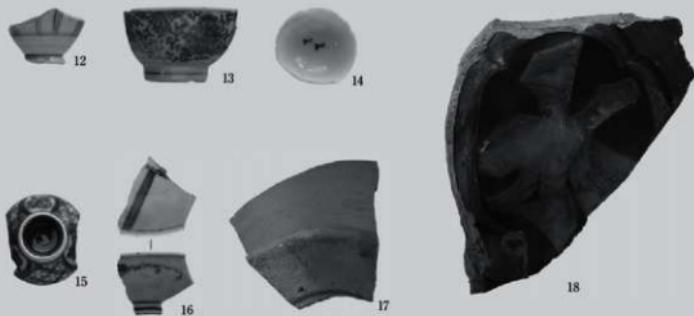


1 - 1 工区出土遗物

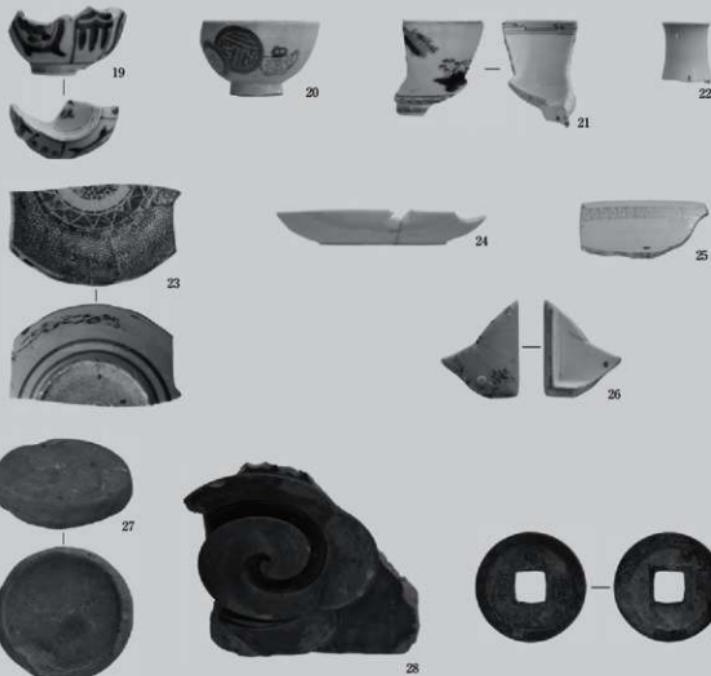


1 - 2 工区出土遗物

1 第1工区出土遗物(1)



1 - 3 工区出土遗物



1 - 4 工区出土遗物



30



31



32



33

2-1 工区出土遗物



34



35



36



37



38



39



40



41



42



43



44

2-2 工区出土遗物



1 第3工区出土遗物

報告書抄録

書名(ふりがな)	浜松城跡9次(はままつじょうあと9じ)							
編著者名	竹内俊之(編)、鈴木京太郎							
編集機関	浜松市教育委員会 〒430-0929 浜松市中区中央1-2-1 イーステージ浜松オフィス棟 浜松市民部文化財課(浜松市教育委員会の補助執行機関) 〒430-0946 浜松市中区元城町103-2 TEL (053) 457-2466 FAX (053) 457-2563							
発行機関	浜松市教育委員会							
発行年月日	2013年3月9日							
ふりがな 遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はままつじょうあと 浜松城跡	静岡県 浜松市中区 元城町	22202	01- 04- 13	34度 47分 30秒	137度 45分 15秒	2012年 10月1日 ～ 12月27日	1,396m ²	範囲確認 調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺物	特記事項				
作左山横穴	古墳 (横穴)	古墳時代		1964年調査の横穴を再確認				
浜松城跡	城跡	戦国時代 江戸時代	かわらけ 陶磁器 銭貨	作左曲輪において、戦国時代～江戸時代に遡る可能性のある柱穴を検出				

浜松城跡9次

2013年3月9日

編集機関 浜松市教育委員会

浜松市民部文化財課

(浜松市教育委員会の補助執行機関)

〒430-0946 浜松市中区元城町103-2

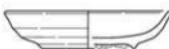
発行機関 浜松市教育委員会

印 刷 株式会社松井ビ・テ・オ・印刷

Hamamatsu Castle

The 9th excavation report

A Report of Archaeological Investigation on 16th-19th
Century Castle in Western Shizuoka, Japan



March, 2013

Hamamatsu City, Board of Education